

大宰府条坊跡

第123次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

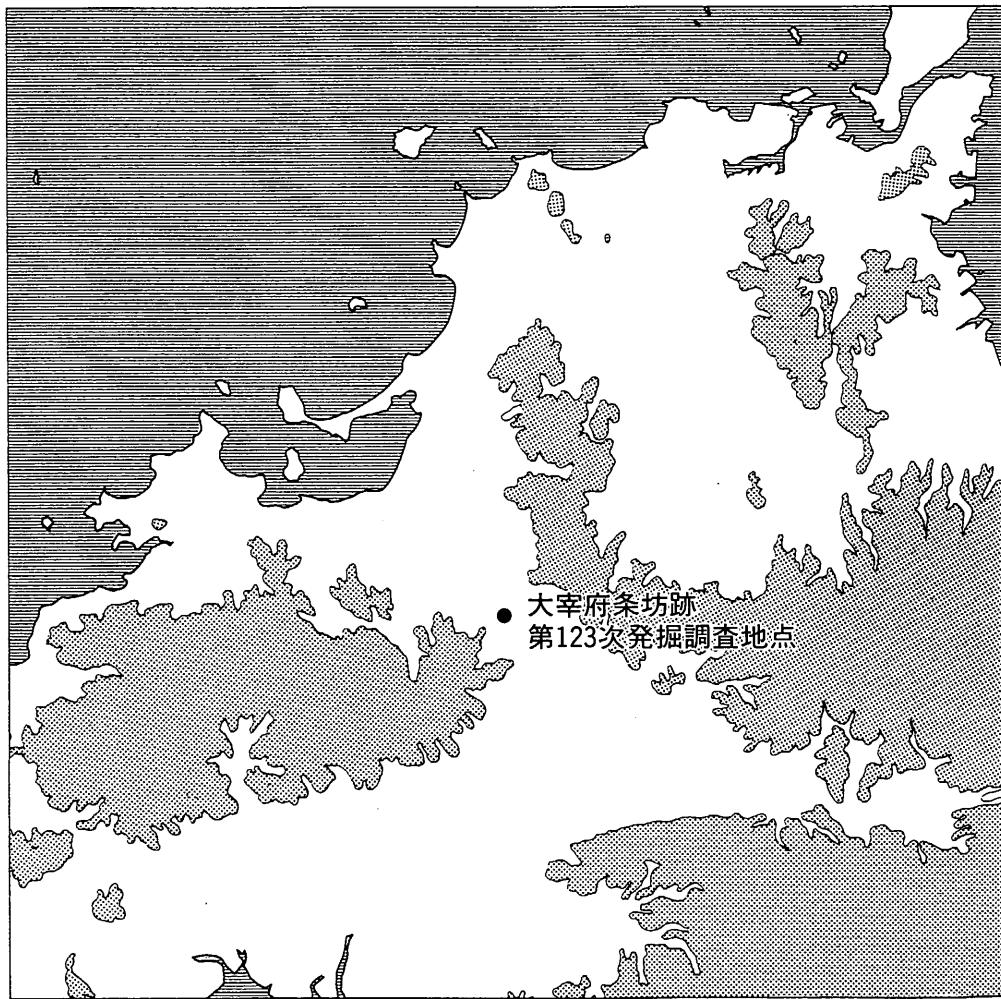
第59集

1998

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第123次発掘調査



序

筑紫野市は福岡市の南に位置し、面積は約87km²を有します。その大半は山間地ですが、市の中核を南北に走る狭長な平野部は福岡平野と筑紫平野を結んでいます。この地理的な条件から、筑紫野市は九州北部海岸部と九州内陸部を結ぶ交通の要衝としての歴史を積み重ねてまいりました。現在、JR鹿児島本線、同筑豊本線、西鉄大牟田線、九州縦貫自動車道、国道3号線、同386号線を初め多くの主要地方道が走っています。さらに九州縦貫自動車道筑紫野インターチェンジや国道3号線筑紫野バイパスなど交通網整備が進み、都市基盤整備等が進んでおります。このような開発も新たな歴史の一頁として積み重ねられるものでしょうが、これらの開発で失われる先人の遺産についても、現在、さらにこれから生きる人々の糧としていかなければなりません。本報告も市の都市計画道路建設に伴って発掘調査されたのですが、この調査の成果が郷土の歴史・文化を知る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご協力賜りました方々に、衷心よりお礼を申し上げます。

平成11年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例　　言

1. 本書は都市計画道路塔原・太宰府線の建設に伴って、筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は、筑紫野市教育委員会が、筑紫野市より予算の執行委任を受け実施した。
3. 発掘調査に係る個別遺構の実測及び写真撮影は仁田坂聰が行ったほか、東亜建設技術株式会社（現場代理人：中野義孝・技術者：白水寿一）に全体の写真測量を委託した。
4. 遺物の実測は、土器を仁田坂が行ったほか、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
石器・鉄器については奥村俊久が行った。
5. 本書の製図は(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 本書の執筆・編集は奥村が行った。

目　　次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	5
調査の概要	5
1. 住居跡	5
(1) SI1005	5
(2) SI4002	5
2. 古 墳	7
(1) B群 1号墳	7
(2) B群 2号墳	9
3. 墳 墓	10
(1) ST1008	10
(2) ST1014	10
(3) ST1016	10
(4) ST2030	10
(5) ST2032	11
(6) ST2045	11
(7) ST2047	11
(8) ST3003	11
(9) ST3004	12
(10) ST3009	12
(11) ST4004	12
(12) ST4005	12
(13) ST4006	14
(14) ST5001	14
(15) ST5002	14
(16) ST5003	14
(17) ST5004	14
4. 土 壤	16
(1) SK1015	16
(2) SK1019	16
(3) SK1021	16

(4) SK1026	16
(5) SK2044	16
(6) SK3005	18
(7) SK3006	18
5. 溝状遺構	18
(1) SD1009	18
(2) SD1012	19
(3) SD2023	19
6. その他の遺構	20
(1) ST2029	20
(2) ST4003	21
(3) SX1001	21
7. ピット出土の遺物	21
IV まとめ	22
1. 住居跡について	22
2. 古墳について	22
3. 墳 墓	22
4. 土 壤	22
5. 小 結	23

挿 図 目 次

		頁
第1図	調査地点周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）	3
第2図	調査地点周辺地形図（縮尺 1/5,000）	4
第3図	SI1005実測図・出土土器実測図（縮尺 1/40・1/2）	5
第4図	SI4002実測図（縮尺 1/40）	6
第5図	SI4002出土土器・石器実測図（縮尺 1/3）	7
第6図	B群1号墳平面図（縮尺 1/100）	折り込み
第7図	B群1号墳周溝A・B断面図（縮尺 1/30）	折り込み
第8図	B群1号墳周溝C遺物出土状況（縮尺 1/30）	折り込み
第9図	B群1号墳石室実測図（縮尺 1/40）	8
第10図	B群1号墳出土鉄器実測図（縮尺 1/2）	8
第11図	B群1号墳出土玉類実測図（縮尺 2/3）	8
第12図	B群1号墳周溝出土土器実測図（縮尺 1/3）	9
第13図	B群2号墳石室実測図（縮尺 1/40）	9
第14図	ST実測図①（縮尺 1/30）	10
第15図	ST実測図②（縮尺 1/30）	11
第16図	ST実測図③（縮尺 1/30）	12
第17図	ST実測図④（縮尺 1/30）	13
第18図	ST実測図⑤（縮尺 1/30）	14
第19図	ST出土土器実測図（縮尺 1/3）	15
第20図	ST出土鉄釘実測図（縮尺 1/2）	15
第21図	SK実測図（縮尺 1/40）	17
第22図	SK出土土器実測図（縮尺 1/3）	18
第23図	SD1009実測図（縮尺 1/80・1/40）	19
第24図	SD1009出土土器実測図（縮尺 1/4）	19
第25図	近世墓実測図（縮尺 1/20）	20
第26図	ST2029・4003出土玉・鉄釘実測図（縮尺 1/1・1/2）	20
第27図	ピット出土土器実測図（縮尺 1/2）	21

付 図

付図	大宰府条坊跡第123次発掘調査遺構配置図（縮尺 1/200）	1葉
----	--------------------------------	----

I 調査に至る経過

平成3年4月14日、都市計画道路塔原太宰府線の建設に伴い筑紫野市都市計画課より教育委員会に対し埋蔵文化財の有無の照会がなされた。この照会に基づき確認調査を行った。確認調査はバックフォーを用い、遺構面観察により行った。遺構は九州縦貫自動車道の西側の削平された低台地とその縁辺部に見られ、その他の部分については開析された谷部となっていた。その後、都市計画課に対し確認調査の報告、並びに文化財保護上必要な協議を行った。平成4年4月1日には筑紫野市長より文化財保護法第57条の3第1項の規定による通知が行われ、同20日付で福岡県教育委員会より発掘調査を実施する旨の通知があった。教育委員会は埋蔵文化財が確認された九州縦貫自動車道西側について発掘調査することとし、平成4年6月6日、文化財保護法98条の2第1項の規定による通知を行い、発掘調査に着手した。調査に当たっては筑紫野市から予算の執行委任を受け、発掘作業を平成4年6月8日より同12月2日まで実施した。

調査組織

総 括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕 正敏
庶 務	筑紫野市教育委員会 教育部	部 長	岡部隆太郎
	教育部 社会教育課	課 長	竹田 征治
	社会教育課 文化財係	係 長	山野 洋一
	社会教育課 文化財係	主 事	奥村 俊久
発掘調査	筑紫野市教育委員会	嘱 託	仁田坂 聰

(現唐津市教育委員会技師)

II 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。東西からは三郡山塊、脊振山塊が迫り、狭長な平野部を有し、この平野部は福岡平野と筑紫平野の分水嶺ともなっている。市の北部は太宰府市と境を接し、推定大宰府条坊^{註1}の南側半分は当市の市域に入る。また、市の南部、佐賀県基山町との境となる基山には基肄城があり、大宰府に羅城を想定すれば筑紫野市が其の中心部に位置する。また御笠地区遺跡A地点^{註2}では万葉集に詠われた蘆城駅家と想定される遺構が発見され、また大宰府条坊跡第99次発掘調査^{註3}では大宰府西門ルートといわれる官道が、岡田遺跡群^{註4}からは大宰府から豊後方面へ向かうと考えられる官道が発見され、筑紫野市内からの大宰府関連遺構の発見も少なくない。

大宰府条坊跡123次発掘調査地点は推定条坊右郭21条9坊に位置し、脊振山塊の東北端、天拝山から北へ延びる一尾根の裾端部に所在する。尾根の裾端部はいったん標高62.7mの小山を形成し、さらに北側に40m代の低丘陵が延びる。この部分が今回の調査地点である。開析された小谷部を隔てた東側の低丘陵は脇田遺跡A地区、先の小山部分は同遺跡B地区としている。A

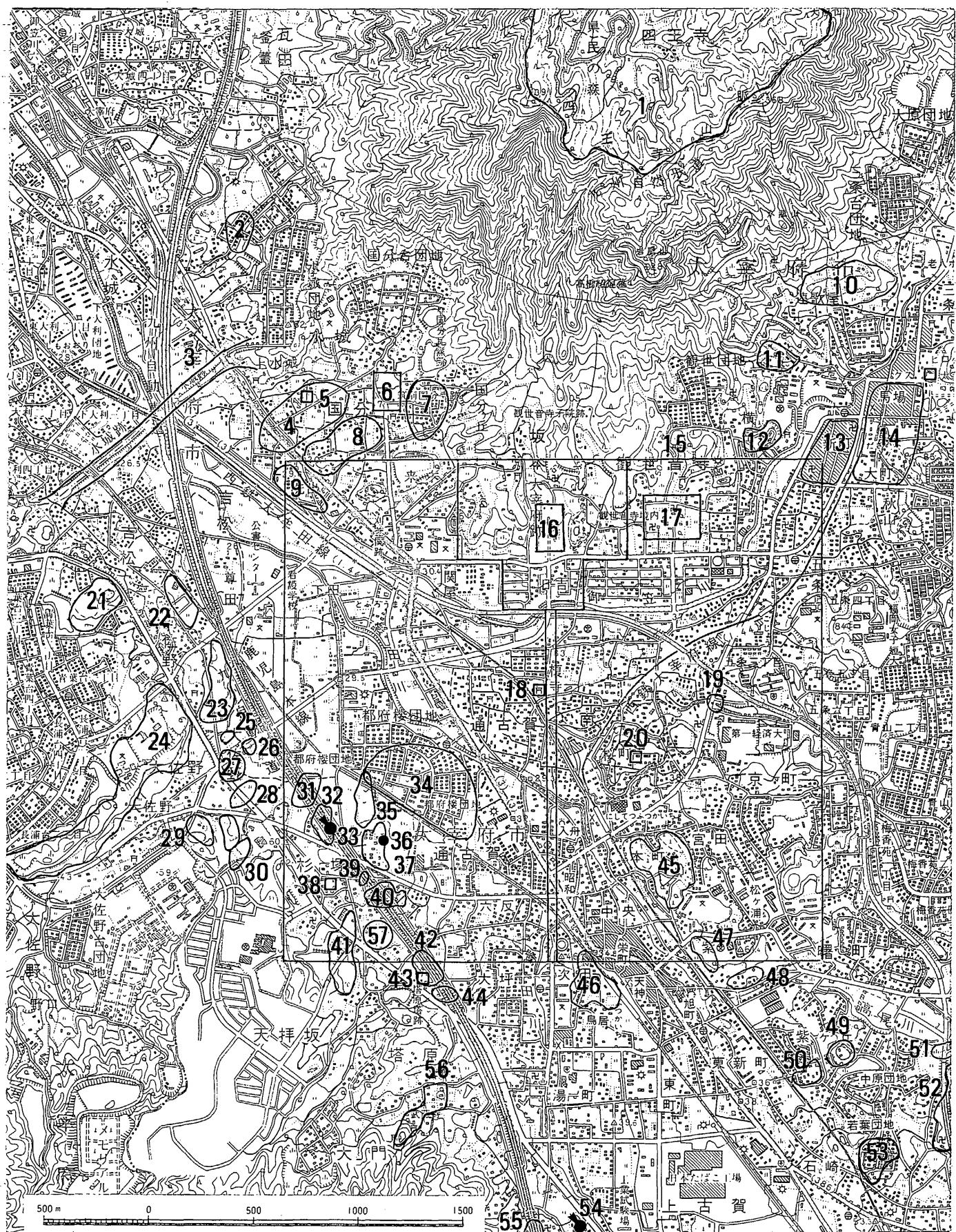
地区は昭和57年に建築行為に伴い発掘調査を実施しており、4世紀後半から5世紀前半代の豊穴式住居跡7軒と横穴式石室を内部主体とする円墳1基を検出した。またB地区は昭和60年に土取り造成に伴い^{註6}、また昭和63年に都市計画道路建設に伴い^{註7}発掘調査した。弥生時代中～後期の豊穴式住居跡や貯蔵穴を主体とし、弥生時代中期や布留期の土壙、12世紀前半代の墳墓等が検出されている。北側300mには杉塚廃寺、南側300mには塔原廃寺^{註8}といった寺院址があるほか、調査区の東側を通る九州縦貫自動車道建設にあたって、剣塚遺跡^{註9}、唐人塚遺跡^{註10}、桶田山遺跡^{註11}、塔原遺跡など弥生時代から近世に至るまでの遺構が発掘調査されている。

註

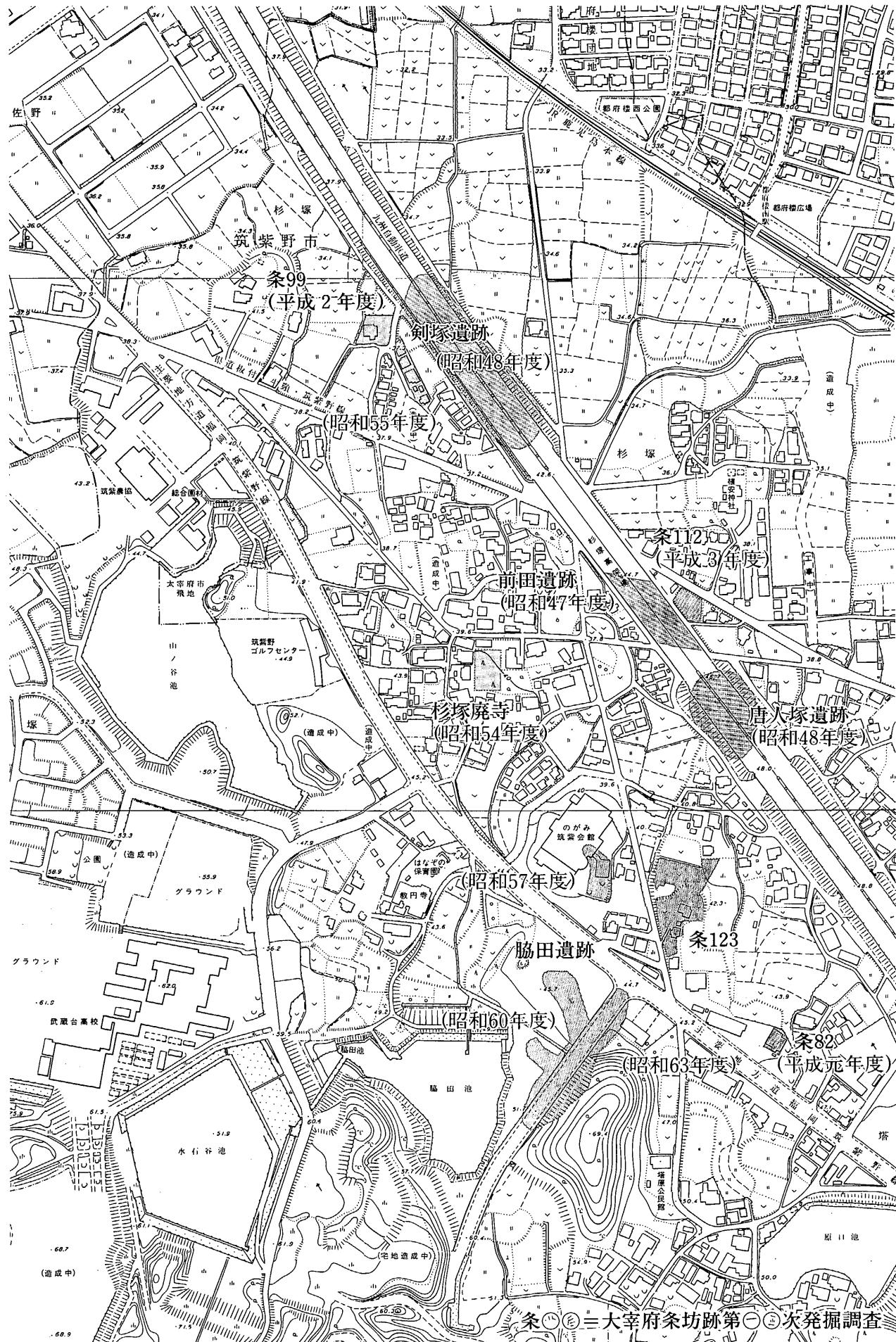
- | | | |
|-----|---|---------------------------------|
| 註1 | 「大宰府都城の研究」鏡山猛 | 1928 |
| 註2 | 「御笠地区遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第15集 | 1986 筑紫野市教育委員会 |
| 註3 | 「大宰府条坊跡 第99次発掘調査」
筑紫野市文化財調査報告書第52集 | 1997 筑紫野市教育委員会 |
| 註4 | 「岡田地区遺跡群Ⅰ」筑紫野市文化財調査報告書第56集 | 1998 筑紫野市教育委員会 |
| 註5 | 「脇田遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第9集 | 1984 筑紫野市教育委員会 |
| 註6 | 「脇田遺跡Ⅱ」筑紫野市文化財調査報告書第13集 | 1984 筑紫野市教育委員会 |
| 註7 | 「脇田遺跡Ⅲ」筑紫野市文化財調査報告書第43集 | 1994 筑紫野市教育委員会 |
| 註8 | 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」
「杉塚廃寺」筑紫野市文化財調査報告書第4集 | 1974 福岡県教育委員会
1979 筑紫野市教育委員会 |
| 註9 | 「塔原廃寺」福岡県文化財調査報告書第35集 | 1967 福岡県教育委員会 |
| 註10 | 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV」 | 1978 福岡県教育委員会 |
| 註11 | 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVIII」 | 1978 福岡県教育委員会 |
| 註12 | 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI」 | 1975 福岡県教育委員会 |
| 註13 | 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IV」 | 1974 福岡県教育委員会 |

1	大野城跡	2	浦ノ田遺跡	3	水城跡
4	松本遺跡	5	筑前国分尼寺跡	6	筑前国分寺跡
7	辻遺跡	8	千足町遺跡	9	正尻遺跡
10	原遺跡	11	醍醐遺跡	12	横岳遺跡
13	新町遺跡	14	馬場遺跡	15	大宰府跡
16	大宰府政庁跡	17	觀世音寺	18	榎寺
19	君畑遺跡	20	般若寺跡	21	篠振遺跡
22	原口遺跡	23	前田遺跡	24	宮ノ本遺跡
25	川上久保遺跡	26	雛川遺跡	27	フケ遺跡
28	尾崎遺跡	29	殿城戸遺跡	30	脇道遺跡
31	井ノ尻遺跡	32	剣塚遺跡	33	剣塚1号墳
34	市ノ上遺跡	35	大坪遺跡	36	埴安神社古墳
37	大門遺跡	38	杉塚廃寺	39	前田遺跡
40	唐人塚遺跡	41	脇田遺跡	42	塔原遺跡
43	塔原廃寺	44	桶田山遺跡	45	峯畠遺跡
46	堀池遺跡	47	通り浦遺跡	48	五穀神遺跡
49	カケ塚東遺跡	50	カケ塚西遺跡	51	大曲遺跡
52	野黒坂遺跡	53	針摺遺跡	54	原口古墳
55	八隈古墳群	56	武藏寺跡	57	大宰府条坊跡第123次発掘調査地点

表1 調査地点周辺遺跡（第1図対照）



第1図 調査地点周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）



第2図 調査地点周辺地形図（縮尺 1/5,000）

III 調査の内容

調査の概要

古墳は2基が確認された。脇田遺跡B地点で確認されたものと小規模な谷を隔てるため、名称を整理し先の古墳を脇田古墳群A群とし、本調査で発見されたものをB群とする。そのほかに住居跡(SI)や墳墓(ST)、土壙(SK)、その他ピット(SP)を多数検出した。

1. 住居跡

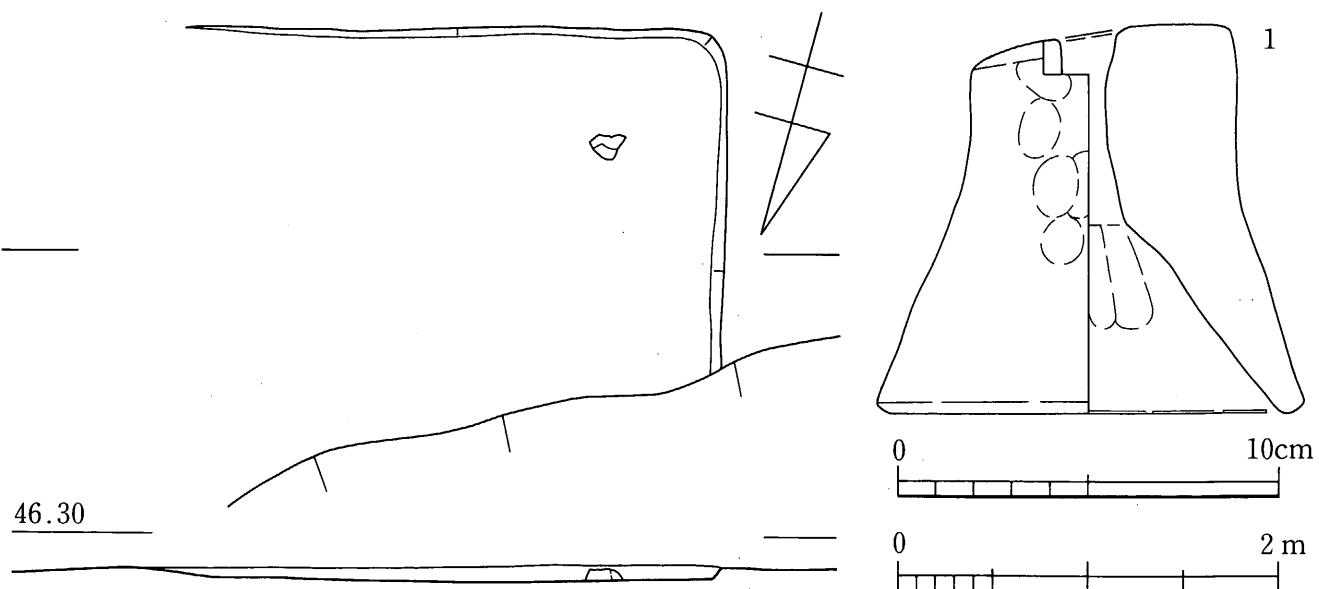
(1) SI1005 (第3図 図版2(1))

調査区の上段に位置した方形プランを呈す竪穴式住居跡である。1号墳周溝(A)に切られる。全体に残りが悪く、南西隅コーナー付近の検出に止まった。壁高はコーナー部で8cmを測る。

出土遺物 (第3図 図版12)

土師器

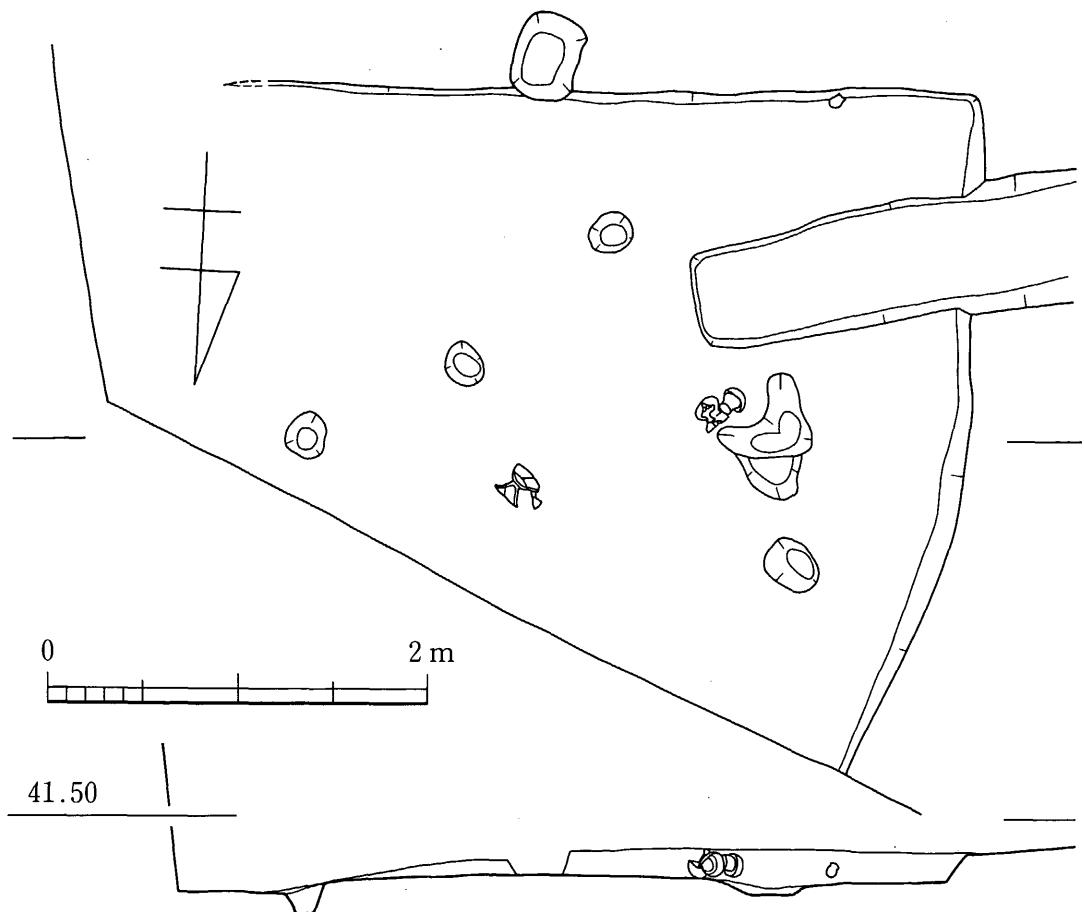
1は支脚で裾の一部を欠失する。器高10.3cm、底径11.3cmを測る。径6.8cmの受け部中央には径1.4cm程の穿孔を有す。全体に厚手で、色調はにぶい黄橙色～褐灰色を呈す。



第3図 SI1005実測図・出土土器実測図 (縮尺 1/40・1/2)

(2) SI4002 (第4図 図版2(2))

調査区の最も低い位置で検出した方形プランの竪穴式住居跡である。対角線上に約1/2余りを欠失し、南側をST4005に切られるが、南西コーナー部壁高は26cmが残る。主柱穴は2本と推定され、柱穴間の床面よりやや浮いた状態で土器が出土した。

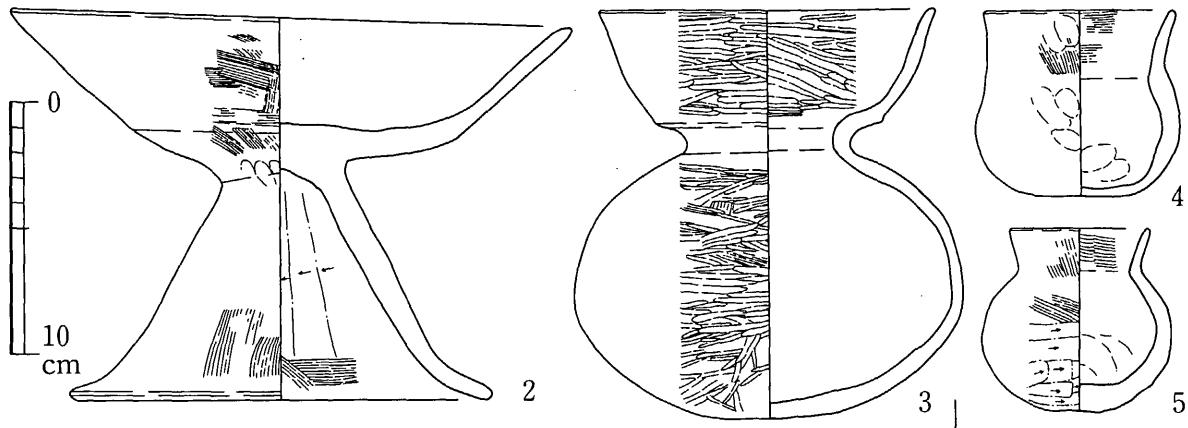


第4図 SI4002実測図（縮尺 1/40）

出土遺物（第5図 図版12）

土師器

2は1/2足らずを欠失する高壺で、口径22cm、器高15.2cm、脚裾径16.6cmを測る。壺部は底部からあまく屈曲し、直線的に外傾する体部に至る。脚部は円錐形に開き、端部は緩やかに短く引き出される。壺部から脚部に至る外面は刷毛目調整され、筒部外面はその後にナデを施す。内面筒部はヘラで調整され、裾部は刷毛目調整される。全体に整形は粗い。3は体部中央の一部が欠失する壺である。口径13.3cm、器高16.2cm、胴部最大径15.4cmを測る。比較的すわりの良い偏球状の体部から、すぼまった頸部を経、大きく屈曲して口縁部に至る。口縁部はやや外傾して立ち上がり、僅かに中央部に張りをもつ。外面は体部下半を丁寧な手持ちのヘラケズリを行い、その後頸部を除く全面を横方向の刷毛目で調整する。仕上げは丁寧なミガキを全面に施し調整を消す。内面の口縁部はミガキ、底部は丁寧なヘラケズリ、体部はナデを施す。粒子の細かい良好な胎土を用いるが、部分的にやや粒子の大きい長石が目立つ。色調は橙色を呈し、堅緻に仕上がっている。その形態から龜を意識した可能性が考えられる。4・5は小壺で、それぞれ口径7.5cm・5.5cm、器高7.4cm・7.3cm、胴部最大径8.0cm、7.3cmを測る。4はすわりの良い底部から7/10程の位置に締まりの強くない頸部があり、口縁部は僅かに外傾して立つ。5は底部から3/4程の位置に頸部がある。比較的すわりの良い底部から、胴部は球状に張り、すぼまった頸部から、口縁部はやや外傾して立つ。4の胴部下半は手持ちのヘラケズリが施される。6は砂質凝灰岩製の砥石で両端を欠失する。



第5図 SI4002出土土器・石器実測図（縮尺 1/3）

2. 古 墳

(1) B群1号墳（第6～9図 図版3）

1号墳は調査区の最も高い位置に所在し、旧地形の尾根筋の先端に位置する。民家が上部にあったため、石室中央を基礎が貫き、周囲も削平や攪乱により古墳の大半は失われる。

南半側の周囲には周溝と考えられる3本の溝状遺構が検出さ

れ、これから墳丘は径12m程の円墳と推定される。石室は大破しており、石材の大半が抜かれる。概ね原位置を保つと考えられる石材は北西隅の一群のみである。床面には敷石が若干残る。主軸は石室掘り方からN-85°-Wにとった。周溝の状況や石室の掘り方から内部主体は西に開口する单室の横穴式石室の可能性が高い。

出土遺物（第10～12図 図版12・13）

鉄器・装身具は石室内の埋土より、須恵器は周溝Cより出土した。

鉄 器

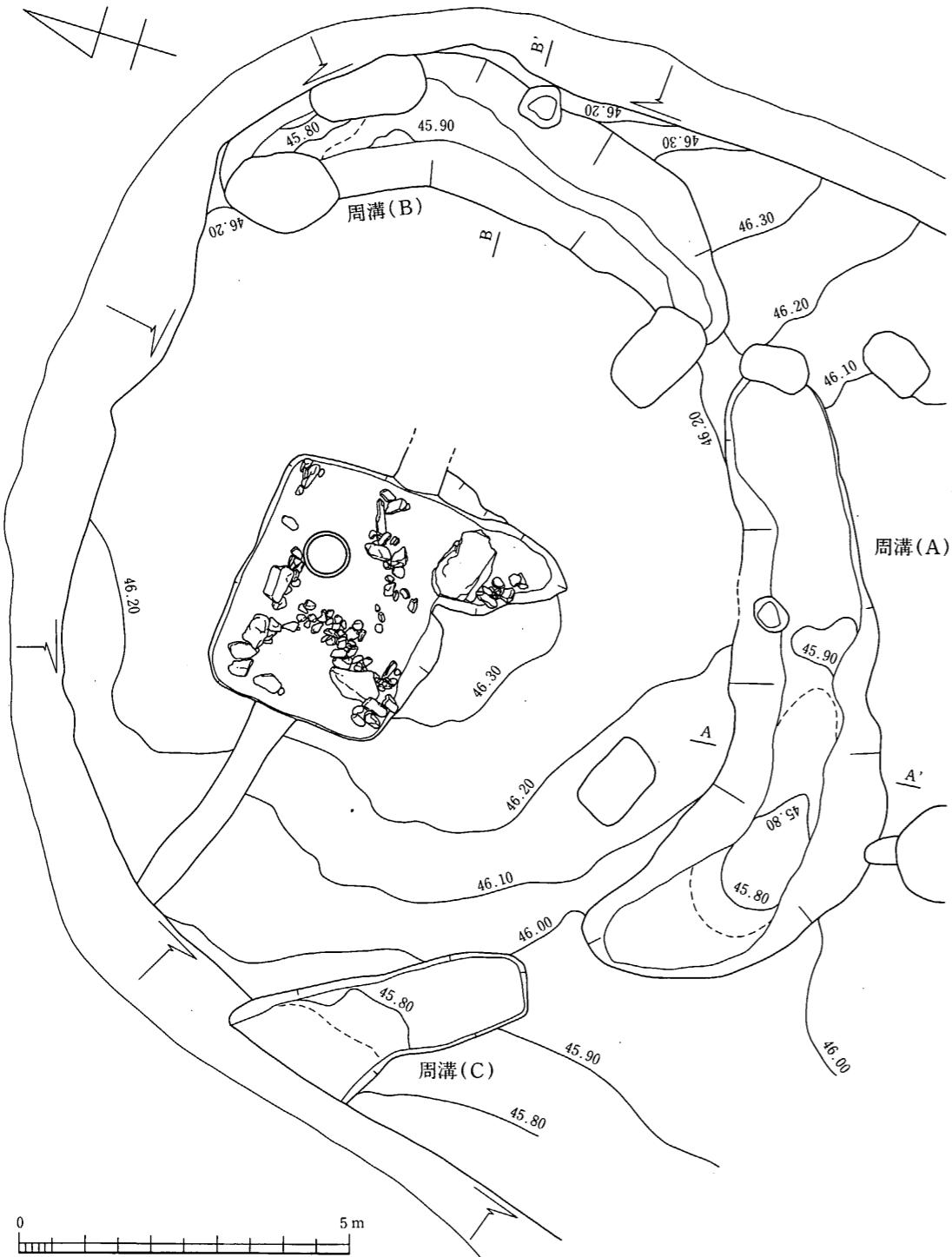
7は刀子の関部の破片である。残存長5.1cm、背幅4.5mmを測る。8～10は鉄族で、8・9は柳葉式に、10は方頭式に属す。

装身具

11～13は濃緑色を呈す碧玉製の管玉である。11・12は片側から、13は両側から穿孔される。14は丸玉で濃緑色を呈す碧玉製である。穿孔は片側より行われる。

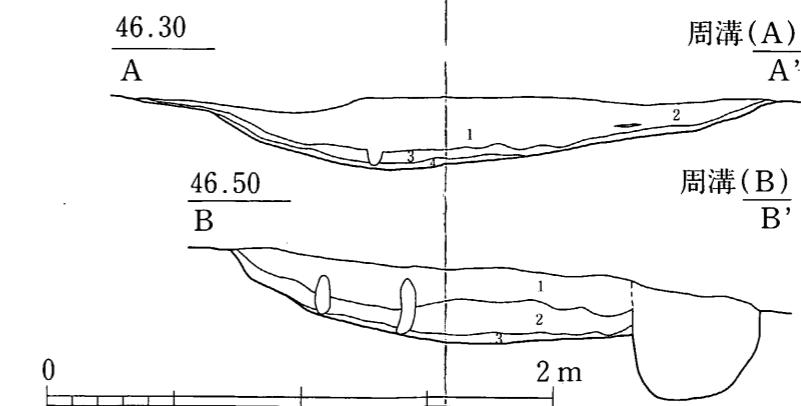
須恵器

15～18は高壺の蓋である。口径は12～13cm、器高は5.1～5.8cmを測る。口唇部は短く外方に引き出され、器高の1/2を占める体部は僅かな張りをもって直立する。体部と天井部の境は稜が巡り、天井部は緩やかなカーブを描き、頂部には摘みが貼付される。天井部の頂部側1/2は回転ヘラケズリされる。19～23は高壺の身である。口径9.95～10.8cm、器高9.35～9.85cm、受部径12.6～13.2cm、脚幅径9.15～9.8cmを測る。壺部は丸みをもつ体部から受部は水平に引き出され、立ち上りは僅かに外反しつつ内傾して立つ。口唇部の段はあまい。体部下半は回転ヘラケズリされる。脚部は器高の1/2程度を占め、緩やかに開き、端部は下方に引き出される。19・20は長方形、21・22は一辺1cm程の正方形の透かしを三方に入れる。24は壺蓋で、天井部か

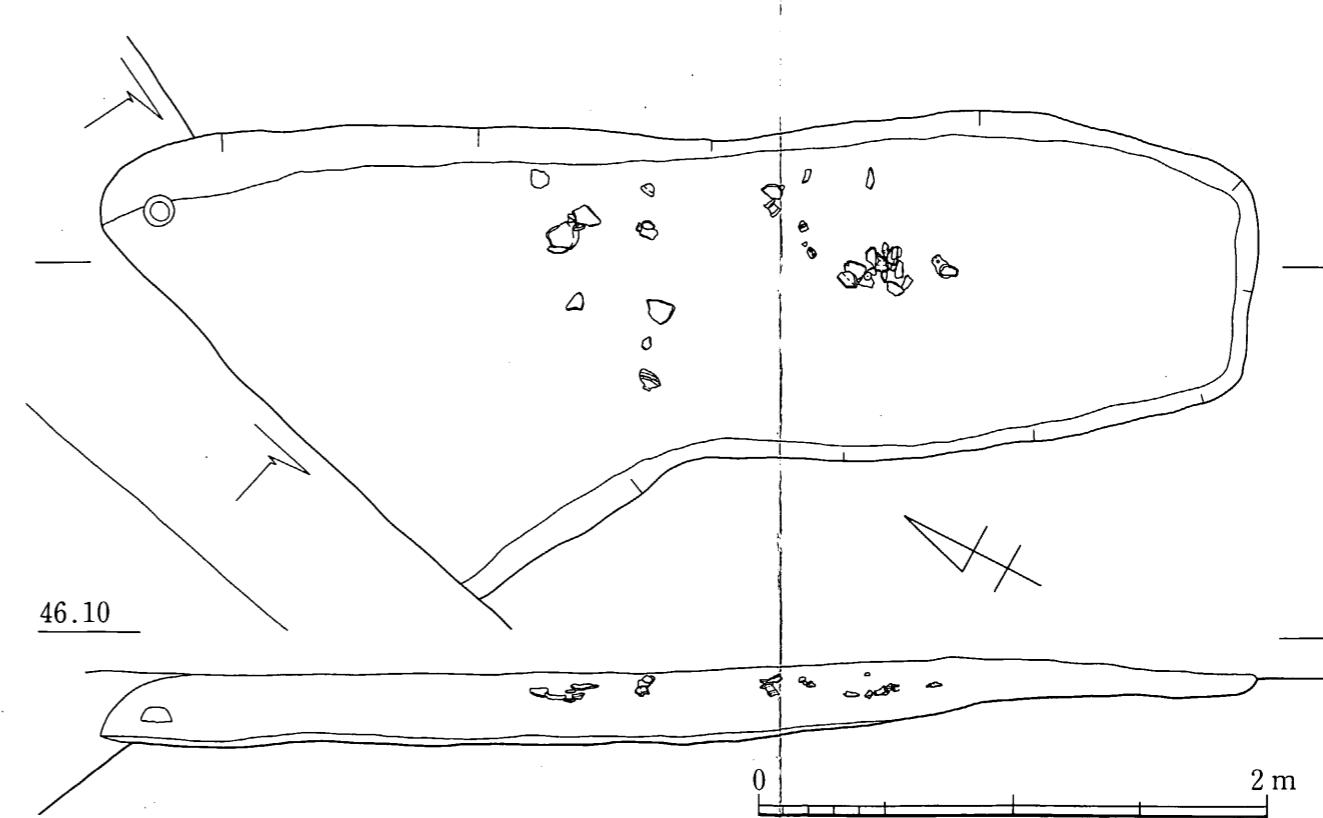


第6図 B群1号墳平面図（縮尺 1/100）

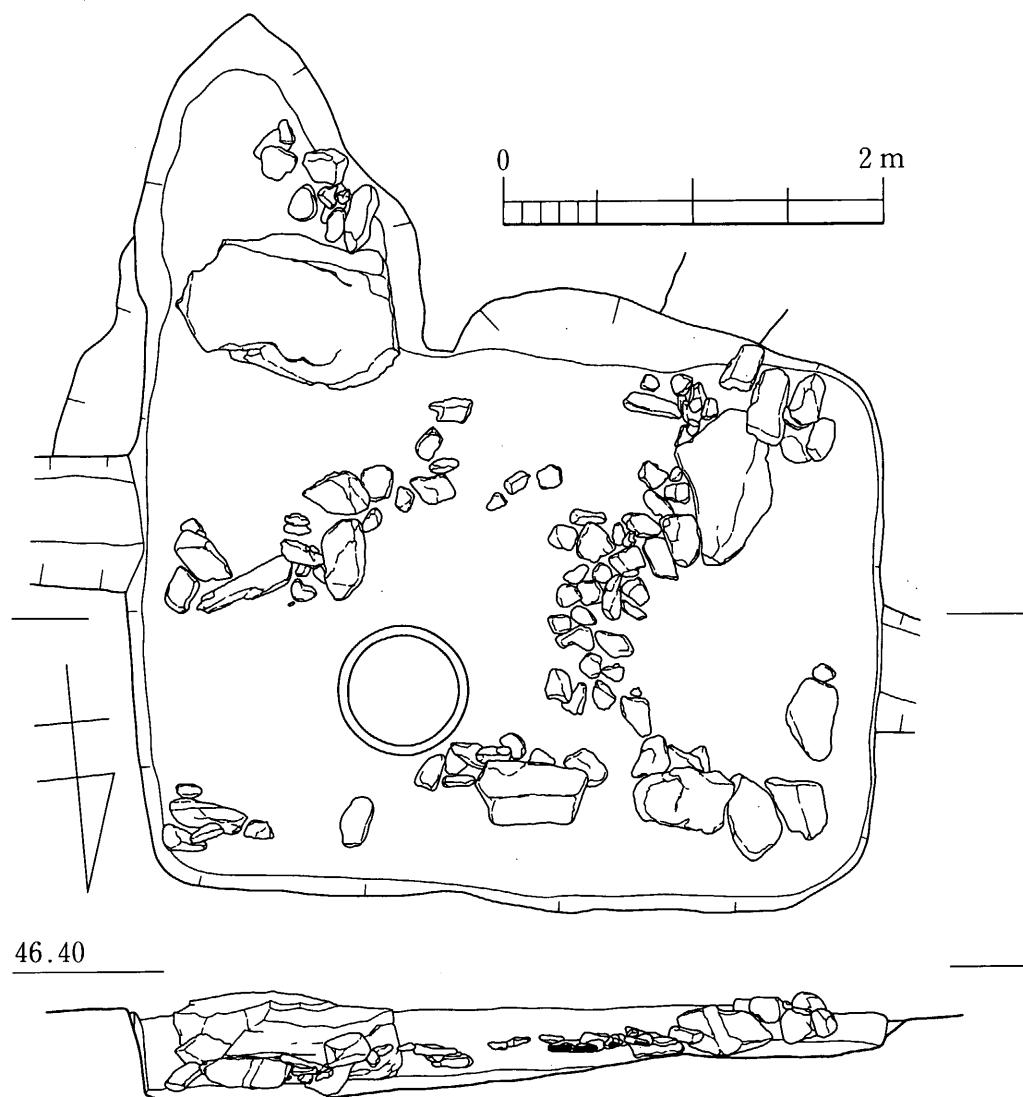
- A - A'
- 1 暗褐色土層
(細砂粒を含む)
 - 2 明黄褐色土層
 - 3 明褐色土層
 - 4 明赤褐色土層
- B - B'
- 1 暗褐色土層
 - 2 暗赤褐色土層
 - 3 明褐色土層
(砂粒を含む)



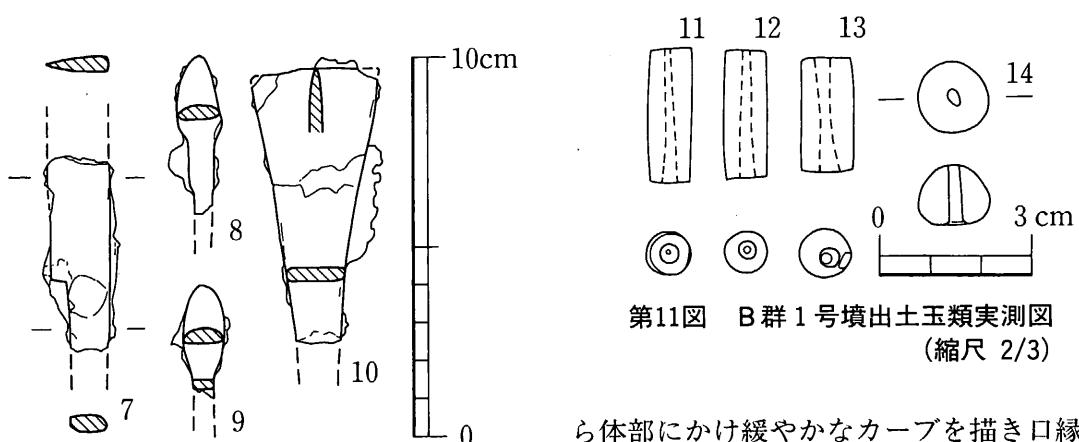
第7図 B群1号墳周溝A・B断面図（縮尺 1/30）



第8図 B群1号墳周溝C 遺物出土状況（縮尺 1/30）



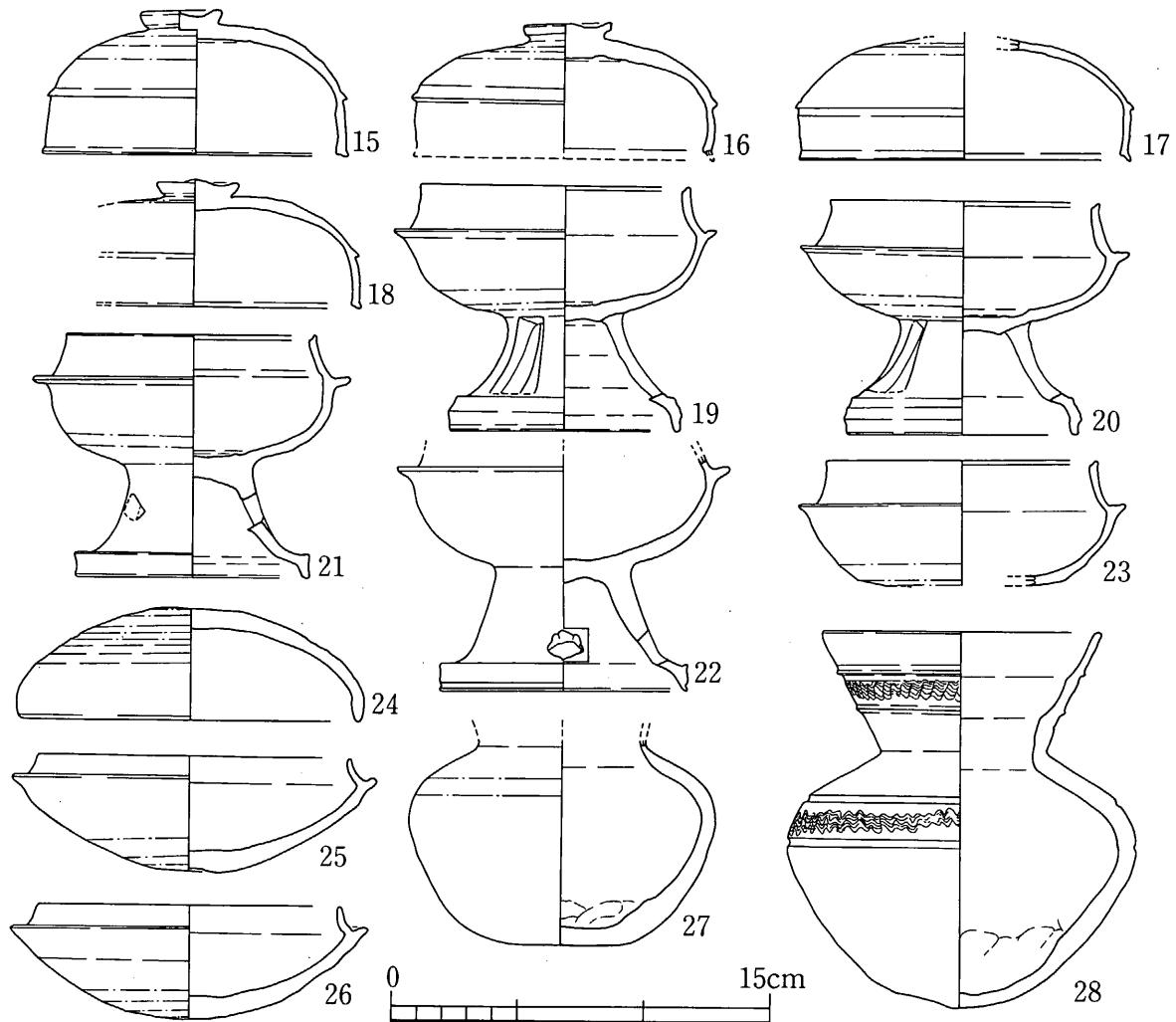
第9図 B群1号墳石室実測図（縮尺 1/40）



第10図 B群1号墳出土鉄器実測図（縮尺 1/2）

ら体部にかけ緩やかなカーブを描き口縁部に至る。口唇部は丸く收まる。頂部側1/2に回転ヘラケズリされる。25・26は坏身で、底部から体部にかけて緩やかなカーブを描き、受部はやや上方に引き出される。立ち上がりは内傾し、中程から上方に引き起こされる。底部は回転ヘラケズリされる。27は口頸部を欠失する小壺であるが、頸部に移る部分の割れ口が薄く短頸壺と考えられる。体部は上位に最大径を

第11図 B群1号墳出土玉類実測図
(縮尺 2/3)

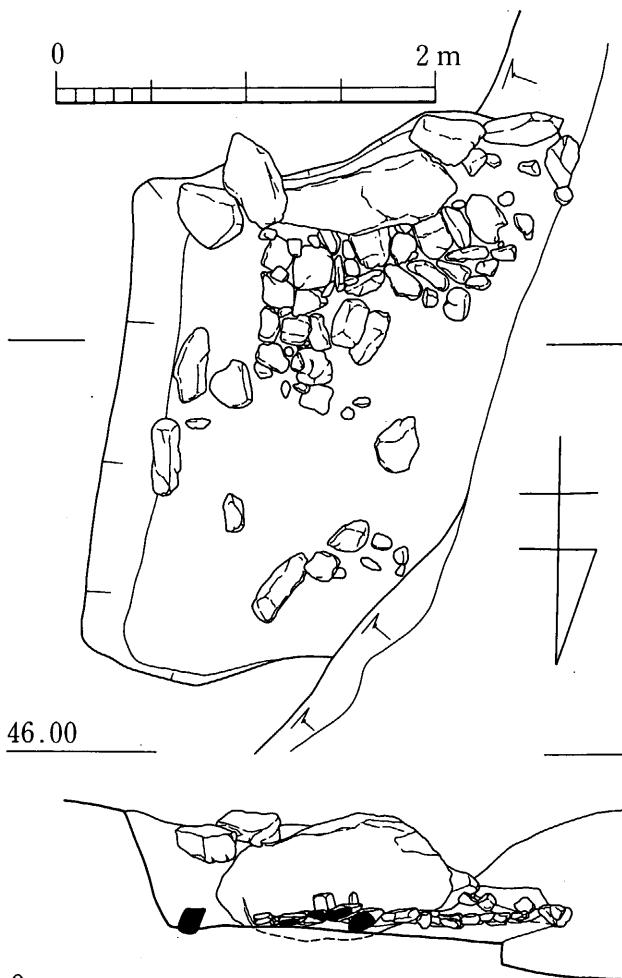


第12図 B群1号墳周溝出土土器実測図（縮尺1/3）

もち浅い弧を描き底部に至る。底部は平行タタキにより整形され、内部に当具痕が残る。28は遽で、口頸部は直線的に外傾し、端部は丸く收まる。体部は肩が張る浅い弧を描き底部に至る。口頸部中程には2条の稜を造り出し、その間に櫛書きによる波状文を巡らす。また肩部にも二条の沈線を巡らし、その間に同様の文様を施す。底部は平行タタキにより整形され、内面には当具痕が残る。外面のタタキは丁寧にナデ消される。口頸部から肩部にかけ自然釉の付着が認められる。

(2) B群2号墳 (第13図 図版4(1))

1号墳の南西10m、旧地形尾根筋の西傾斜部に位置する。本墳も削平により大破し、玄室奥の下部しか残っていない。一石残る腰石は左側奥の石と考えられ、ほぼ真西に



第13図 B群2号墳石室実測図（縮尺1/40）

開口すると思われる。腰石の前面には敷石が僅かに原位置を保っている。

3. 墳 墓

(1) ST1008 (第14図)

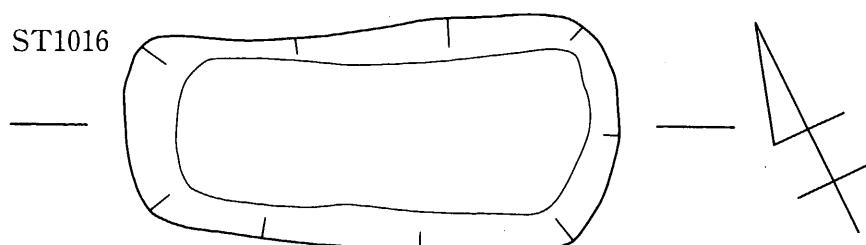
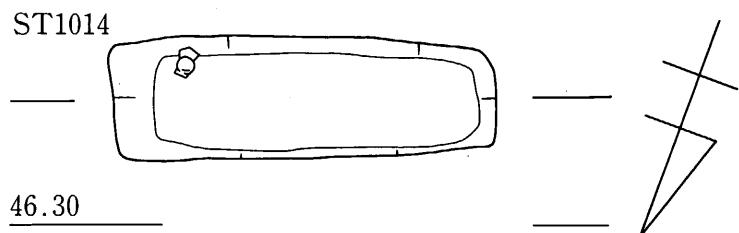
1号墳の西横で検出した。主軸を N-14°-W にとる。平面プランは長方形で約240×70cm を測る。壁はほぼ真っ直ぐに落ち、壁高は約45cm を測る。



(2) ST1014

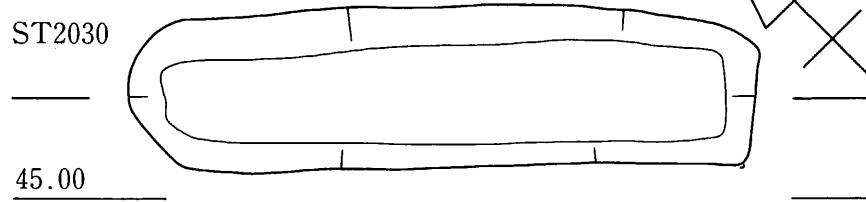
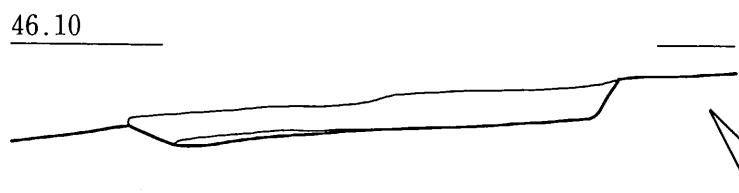
(第14図 図版4(2))

1号墳の南横で検出した。主軸を N-69°-E にとる。平面プランは長方形で約150×50cm を測る。壁はほぼ真っ直ぐに落ちるが、西側の欠失が著しい。壁高は東側で約20cm を測る。北東隅の床面より僅かに浮いて土師器壺(31)が出土した。



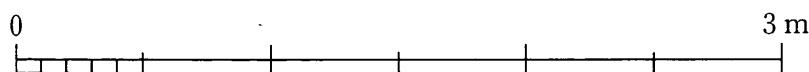
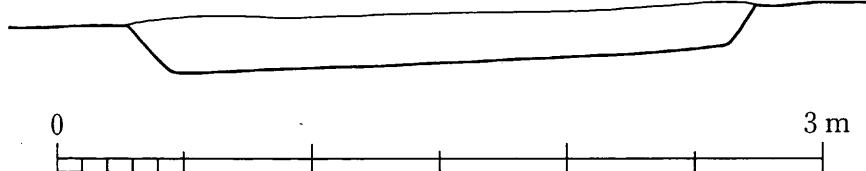
(3) ST1016 (第14図)

1号墳の西横で検出した。主軸を N-64°-W にとる。平面プランは短辺が丸みを帯びる長方形で約195×90cm を測る。壁はやや傾斜して落ち、壁高は10cm 余りを測る。

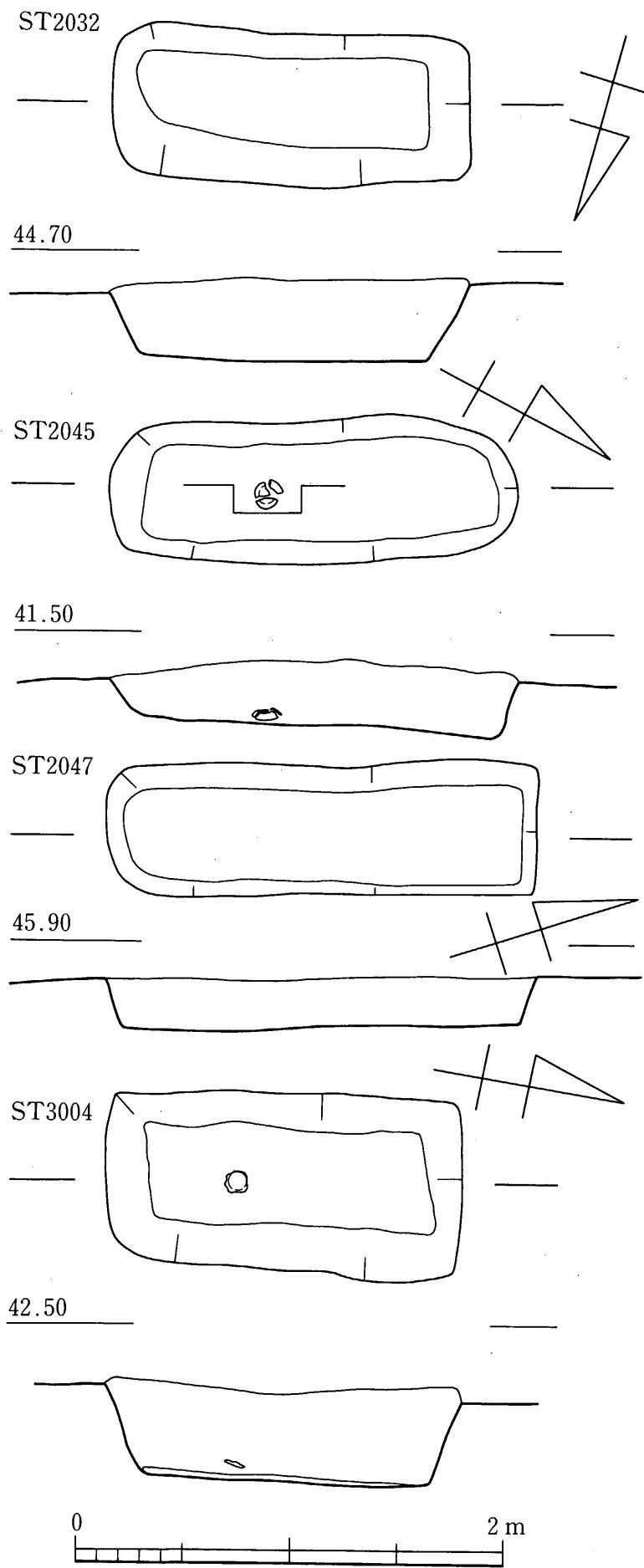


(4) ST2030 (第14図)

1号墳の北側、現地形で1号墳より一段低い位置で検出した。主軸を N-46°-W にとる。平面プランは片側の短辺が



第14図 ST 実測図① (縮尺 1/30)



第15図 ST 実測図② (縮尺 1/30)

丸みを帯びる長方形で約245×60cmを測る。壁はやや傾斜して落ち、壁高は約20cm余りを測る。

(5) ST2032 (第15図)

ST2030の北側で検出した。主軸をN-75°-Eにとる。平面プランは長方形で約168×70cmを測る。壁はやや傾斜して落ち、壁高は約38cmを測る。

(6) ST2045(第15図 図版5(1))

1号墳の北側、現地形で1号墳より一段低い位置で検出した。主軸をN-27°-Wにとる。平面プランは短辺がやや丸みを帯びる長方形で、約190×70cmを測る。壁はやや傾斜して落ち、壁高は約25cm余りを測る。床面中央部より土師器皿(32)が出土している。

(7) ST2047 (第15図)

1号墳の南東側、現地形で1号墳より一段低い位置で検出した。主軸をN-17°-Eにとる。平面プランは一方の短辺が僅かに丸みを帯びる長方形で、約200×60cmを測る。壁は僅かに傾斜して落ち、壁高は約25cm余りを測る。

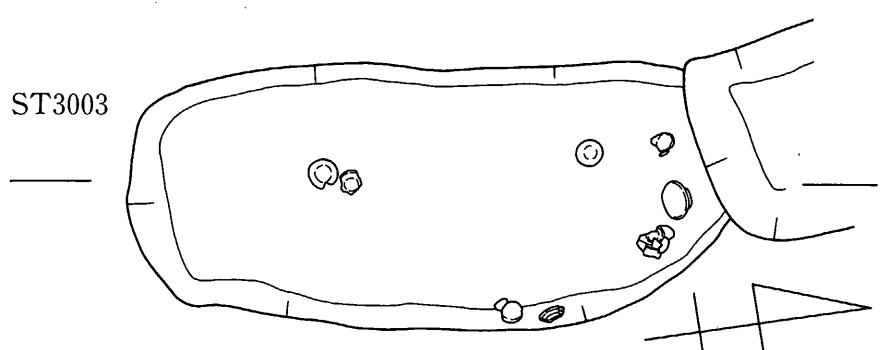
(8) ST3003(第16図 図版5(2))

ST2030～2047よりさらに一段低い位置で検出した。ST3004に切られている。主軸をN-9°-Eにとる。平面プランは略長方形を呈し、約140×100cmを測る。壁はあまり傾斜を持たせずに落ち、壁高は約40cmを測る。床面から土師器碗や壺等(33～42)が出土している。

(9) ST3004

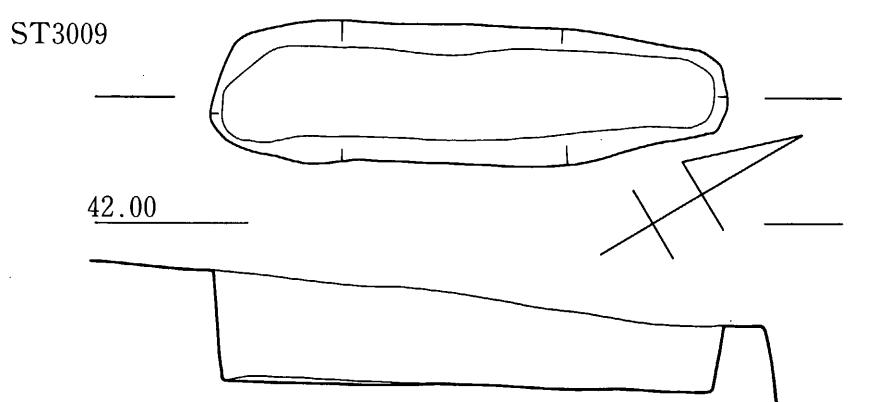
(第15図 図版6(1))

ST3003を切る。主軸をN-10°-Wにとる。平面プランは長方形を呈し、約170×80cmを測る。壁はやや傾斜して落ち、壁高は約40cmを測る。床面から僅かに浮いて須恵器壺(43)が出土している。



(10) ST3009 (第16図)

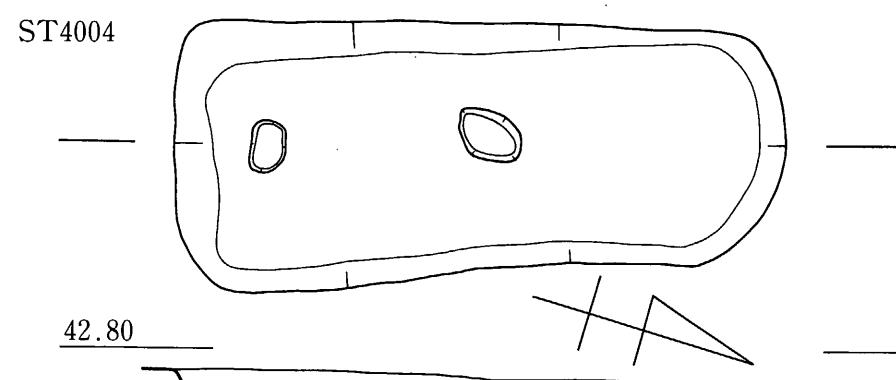
ST3003の南側で検出した。主軸をN-31°-Eにとる。平面プランは略長方形を呈し、約200×55cmを測る。壁はほぼ真っ直ぐに落ち、壁高は約45cmを測る。埋土より土師器壺(44)が出土した。



(11) ST4004

(第16図 図版6(2))

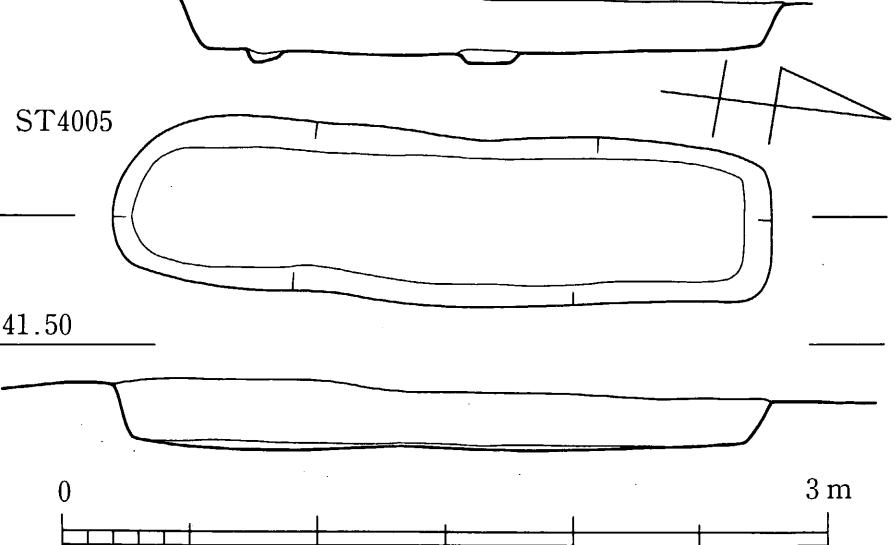
ST3003・3004の東側、さらに一段低い位置で検出した。主軸をN-17°-Wにとる。平面プランは略長方形を呈し、約240×100cmを測る。比較的残りが悪く、壁はやや傾斜して落ち、壁高は約20cmを測る。



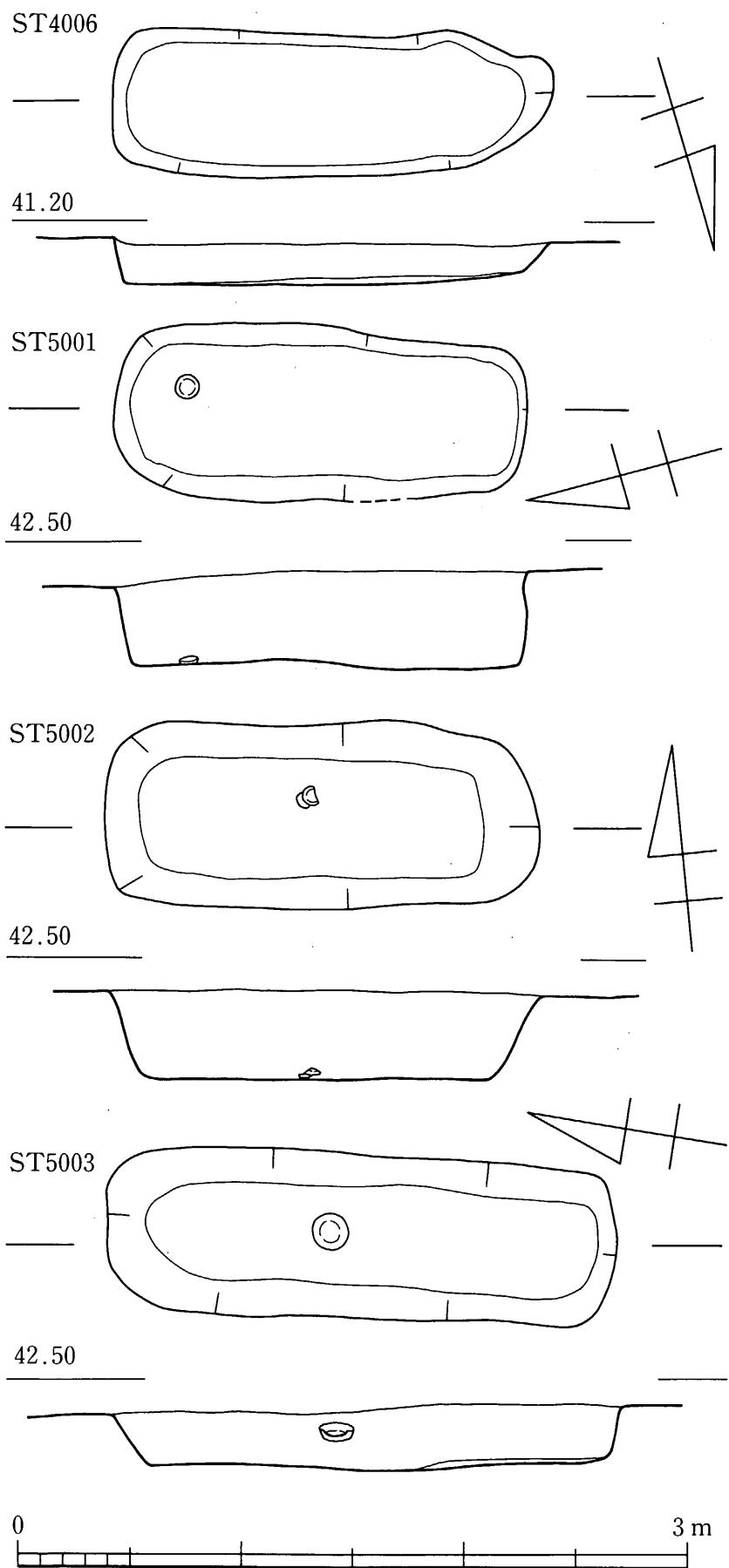
(12) ST4005

(第16図 図版7(1))

SI4002を切る。主軸をN-7°-Wにとる。平面プランは短辺が丸み



第16図 ST 実測図③ (縮尺 1/30)

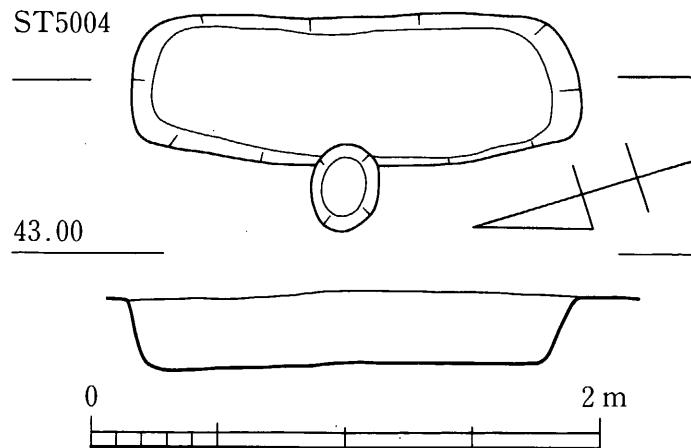


第17図 ST 実測図④ (縮尺 1/30)

を帯びる長方形を呈し、約260×70cmを測る。比較的残りが悪く、壁はやや傾斜して落ち、壁高は約20cmを測る。

(13) ST4006 (第17図)

ST4006の東側で検出した。主軸をN-73°-Wにとる。平面プランは略長方形を呈し、約200×60cmを測る。比較的残りが悪く、プランもやや歪である。壁高は約20cmを測る。



第18図 ST 実測図⑤ (縮尺 1/30)

(14) ST5001 (第17図 図版7(2))

ST3003・3004の西側で検出した。主軸をN-15°-Eにとる。平面プランは隅丸長方形を呈し、約185×80cmを測る。壁は直立し、壁高は約45cmを測る。床面から土師器壺(45)が出土した。

(15) ST5002 (第17図 図版8(1))

ST5001の西隣で検出した。主軸をN-84°-Wにとる。平面プランは隅丸長方形を呈し、約200×80cmを測る。壁は比較的傾斜が強く、壁高は約40cmを測る。床面から土師器壺(46)が出土した。

(16) ST5003 (第17図 図版8(2))

ST5002の西隣で検出した。主軸をN-9°-Wにとる。平面プランは短辺が丸みを帯びる長方形を呈し、約230×60cmを測る。壁高は約25cmを測る。床面から10cm程浮いて須恵器壺(47)が出土した。

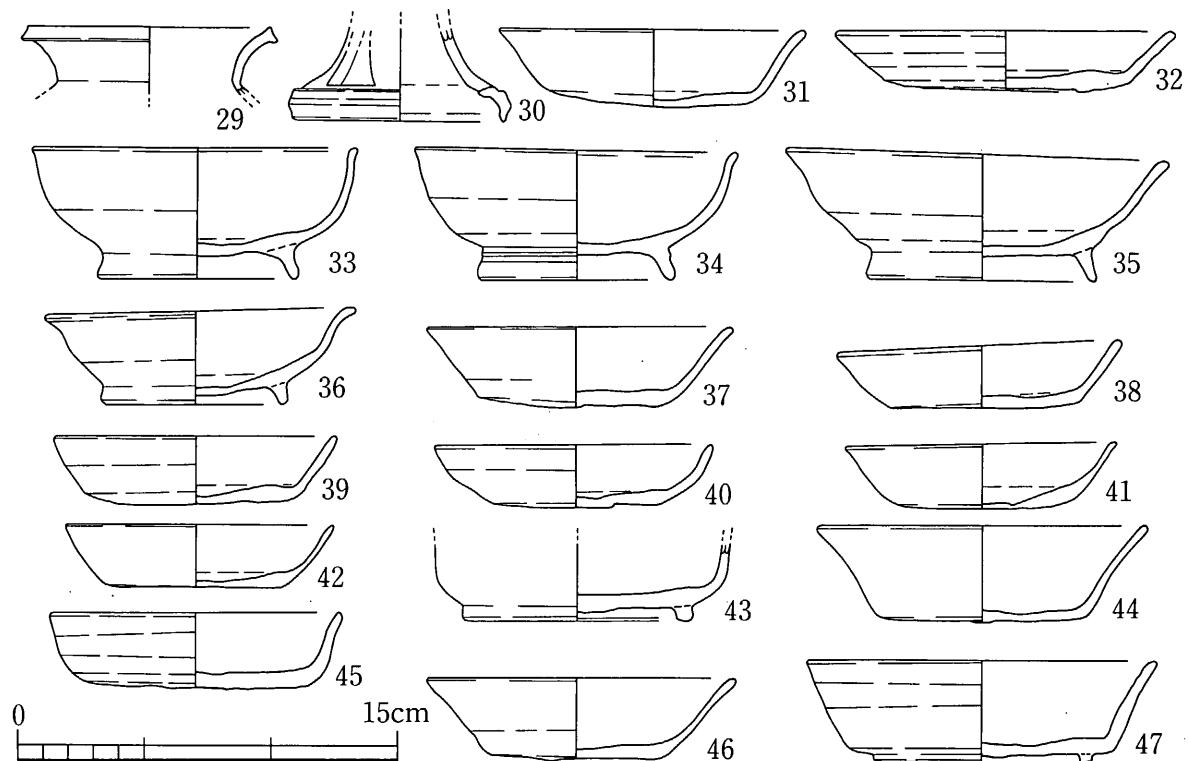
(17) ST5004 (第18図 図版9(1))

調査区の西端で検出した。主軸をN-17°-Eにとる。平面プランは短辺が丸みを帯びる長方形を呈し、約180×60cmを測る。壁はやや傾斜し、壁高は約30cmを測る。

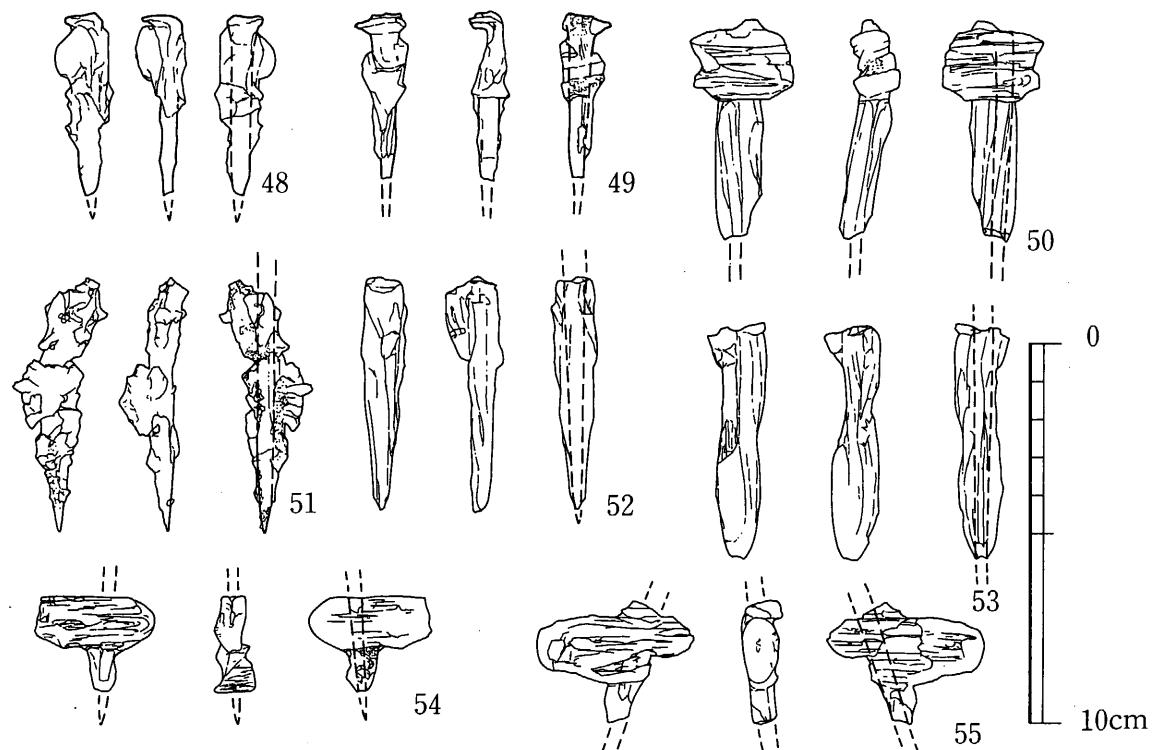
出土遺物 (第19・20図 図版13・14)

29・30はST1004の埋土中から出土した須恵器の小片である。29は小壺の口縁部で1/3程が残る。端部は僅かに上下に引き出され、僅かに肥厚する口唇部をもつ。30は高壺の脚部と考えられるが、やや小振りである。1/2足らずが残るが、2カ所に長方形の透かしが確認され、径に対する角度から4カ所に施された可能性がある。透かしと透かしの間にヘラ書きの線が残る。31はST1014から出土した土師器壺aで僅かに歪む。底部と体部の境はあまく、体部は直線的に外傾し、口縁部は僅かに外反する。32はST2045から出土した皿aである。底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に短く外傾し口縁部にいたる。外面に淡い橙色の化粧土が残る。

33～42はST3003から出土した土師器である。33・34は丸い形態を基本とする椀である。器壁はややあれているが、丁寧なつくりである。口唇部は僅かに外反し、丸い形態を示す体部中央



第19図 ST 出土土器実測図（縮尺 1/3）



第20図 ST 出土鉄釘実測図（縮尺 1/2）

にはあまい稜が巡る。また高台はやや外側に開いて貼付される。35は直線的な体部を基本とするが体部の凹凸が顕著である。高台は比較的細く、外傾して貼付される。36は坏cで口縁部は外反し、体部から底部にかけて丸味をもって移行する。高台は底部の中心からずれて貼付される。37~42は坏aであるが、37は他の坏と比べ法量の差が大きい。体部と底部の境は比較的明瞭である。体部は直線的に外傾し、口縁部はほんの僅かに外反する。38~42は口径10.65~11.25cm、器高2.5~3.2cm、底径6.25~7.45を測る。40は底部から外傾して体部が延び、体部中央でさらに引き起こされ口縁部に至る。これ以外の坏は比較的直線的な体部を持つが、全体的にシャープさに欠ける形態を示す。なお、41の口唇部3カ所に灯芯によるとみられる煤の付着がある。43はST3004から出土した須恵器の坏身の底部の破片である。体部と底部の境は稜を持たず、屈曲したカーブを描いて立ち上がり、底部には短い断面四角形の高台が貼付される。44はやや大振りの坏で、ST3009から出土した。器壁は全体に薄く仕上げられ、底部から屈曲し浅く外傾して立ち上がる体部はその中ほどで大きく外反する。45はST5001から出土した坏aである。平坦に削り上げられた底部から、緩やかに屈曲して体部に至る。体部は浅く外傾して立ち、口縁部は僅かに外反する。46はST5002より出土した。底部は径がやや小さい印象を受け、体部は僅かに外反して開く。47はST5003から出土した須恵器の坏身である。底部は体部との境の屈曲部から1cm程内側に低い断面四角形の高台が貼付される。体部はやや外傾して立つ。全体に厚ぼったいつくりである。48から55はST3003から出土した鉄製の釘である。いずれも木質の付着が多い。また図化しなかった小片が30点ほど出土している。

4. 土 壤

(1) SK1015 (第21図)

調査区の南端で検出した。平面プランは略方形で、約220×200cmを測る。残りがわるく、壁は傾斜して落ち、壁高は約25cm余りを測る。床面は括れた長楕円形を呈す。

(2) SK1019 (第21図)

SD1012の西側脇で検出した。主軸をN-75°-Wにとる。平面プランは短辺が丸く収まる長方形を呈し、約255×100cmを測る。残りがわるく、壁高は僅かしか残っていないが、西側に下がる床面に礫が埋められていた。

(3) SK1021 (第21図)

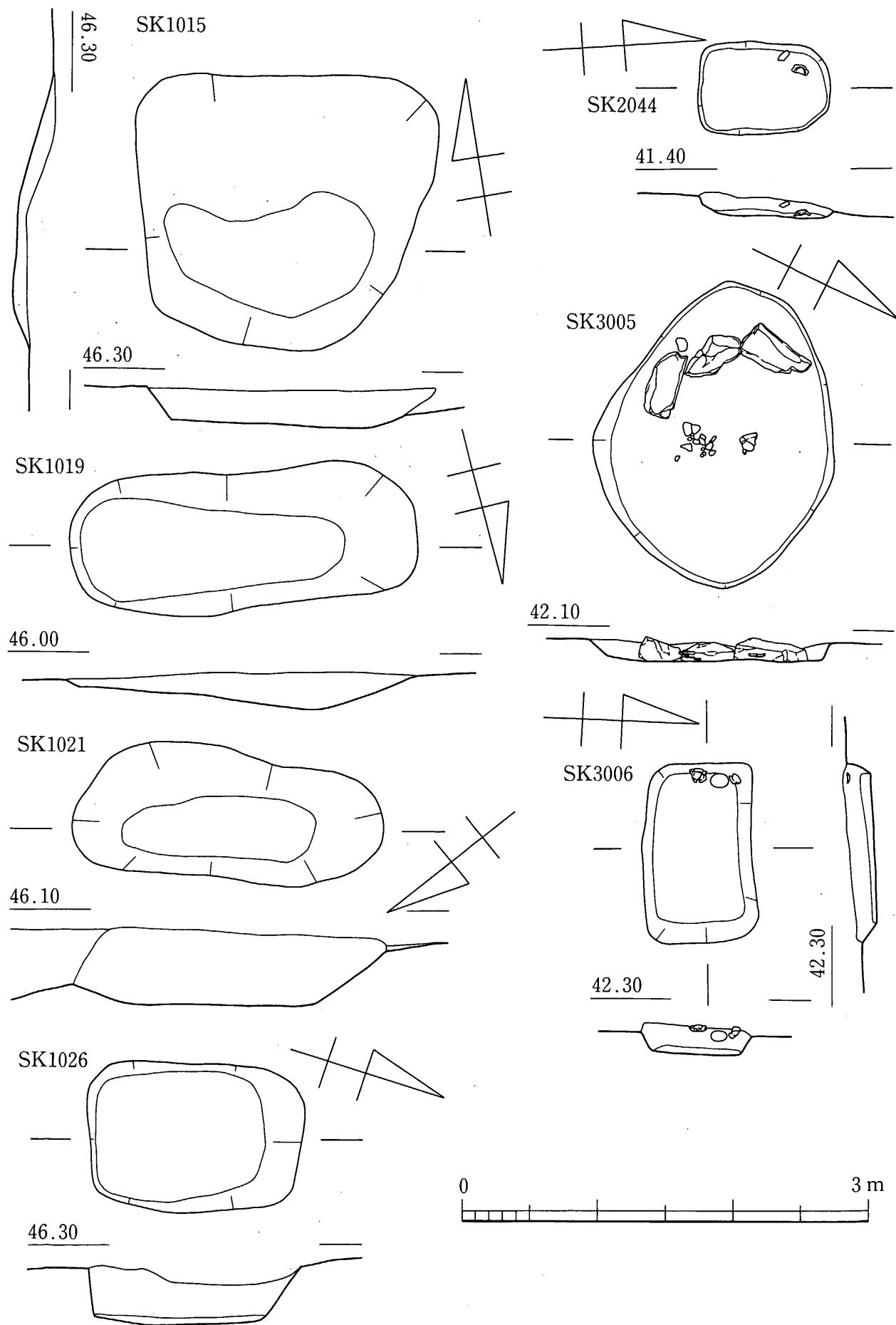
SD1012と切り合って検出された。主軸をN-38°-Eにとる。平面プランは略楕円形で、約225×90cmを測る。壁は傾斜して落ち、壁高は約50cm余りを測る。床面は不整楕円形を呈す。

(4) SK1026 (第21図)

SK1015の南で検出された。主軸をN-18°-Wにとる。平面プランは方形で、約155×110cmを測る。壁は北壁を除き垂直に落ち、壁高は約40cmを測る。床面も方形を呈す。

(5) SK2044 (第21図 図版9(2))

SK1015などより一段低い段で検出された。主軸をN-4°-Eにとる。平面プランは略方形で、約100×70cmを測る小振りの土壙である。壁体は僅かしか残っていないが床面より須恵



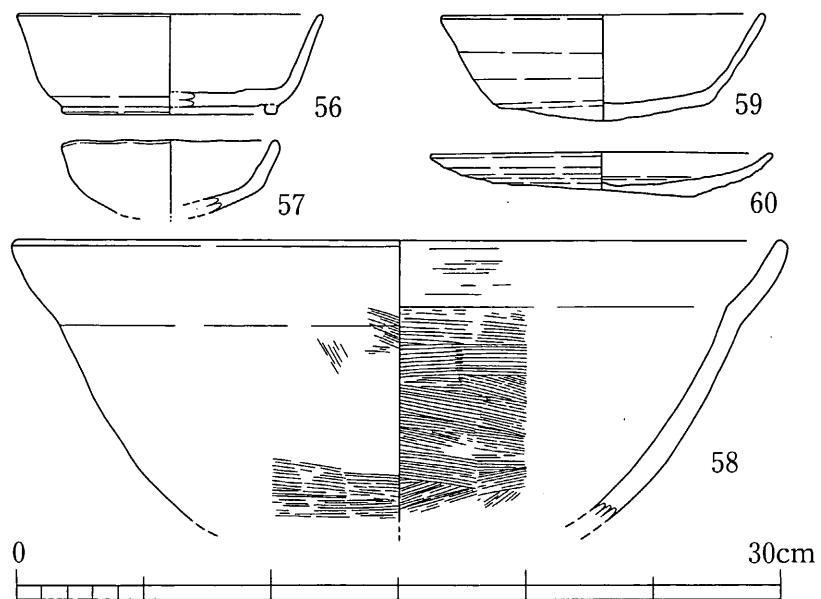
第21図 SK 実測図 (縮尺 1/40)

器坏身片と埋土中から手捏ね土器が出土した。

(6) SK3005

(第21図 図版10(1))

SK2044よりさらに一段低い段で検出された。ST3004の北隣に位置する。主軸をN-25°-Wにとる。平面プランは略楕円形で、約230×180cmを測る。壁体の残りは悪いが、西側壁際に3石が配され、中央床面よりやや浮いて土鍋が出土した。



第22図 SK 出土土器実測図 (縮尺 1/3)

(7) SK3006 (第21図 図版10(2))

SK3005の南側で検出された。ST3003の東隣に位置する。主軸をN-3°-Wにとる。平面プランは長方形で、約130×80cmを測る。壁体は15cm程の残りであるが、西側壁際から土師器が出土した。

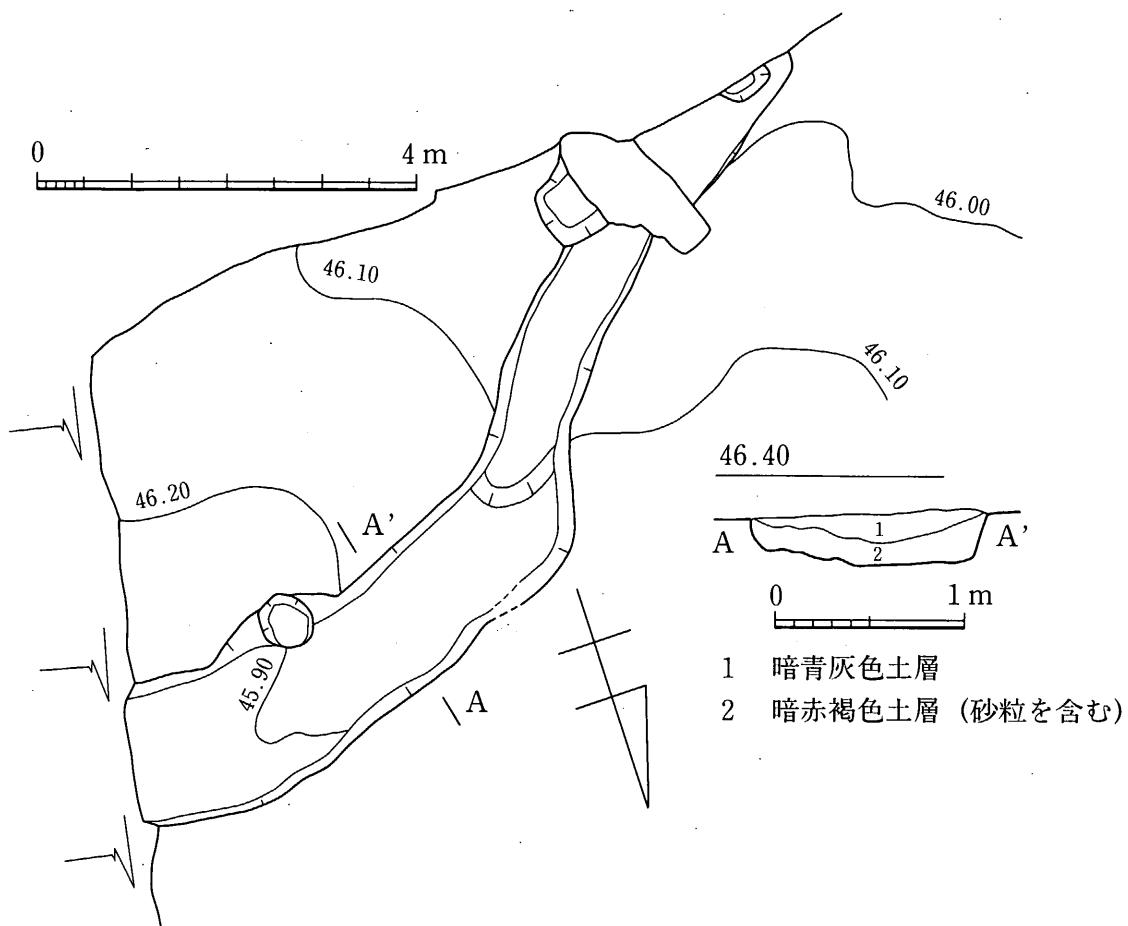
出土遺物 (第22図 図版14・15)

56・57はSK2044から出土した。56は須恵器の坏身で、口径12.1cm、器高4cm、高台径8.5cmを測る。体部から口縁部にかけては僅かしか残っていないが、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。体部から屈曲して底部に至る。高台はこの屈曲部のすぐ内側に貼付される。57は1/2程を欠失する手捏ね土器で口径8.6cm、器高2.9cmを測る。器面は荒れているが、比較的丁寧に仕上げられている。58はSK3005から出土した土鍋で、体部の1/2と底部を欠失する。口径30.4cm、残存高11.1cmを測る。体部は僅かに丸味をもって外傾し、口縁部は内湾して開く。口唇部は丸く収まる。内面は目の細かい刷毛で丁寧に調整される。外面は煤が多量に付着する。59・60はSK3006から出土した土師器である。59は約1/3を欠失する坏aである。口径12.8cm、器高4.2cm、底径8.2cmを測る。体部は直線的に外傾し、底部はヘラ切り離しされる。色調は黄橙色を呈す。60は皿aで完形である。口径13.5cm、器高1.75cm、底径7.3cmを測り、色調は浅黄橙色を呈す。体部は大きく開き、間隔が狭い凹凸が目立つ。底部はヘラ切り離しされ、板状圧痕が残る。

5. 溝状遺構

(1) SD1009 (第23図)

1号墳の南側をやや不整形な弧を描き走る。幅1.5~0.8m、深さは約25cmを測る。床面は溝の中程で段を形成するが、明確な傾斜は示さない。



第23図 SD1009実測図（縮尺 1/80・1/40）

(2) SD1012

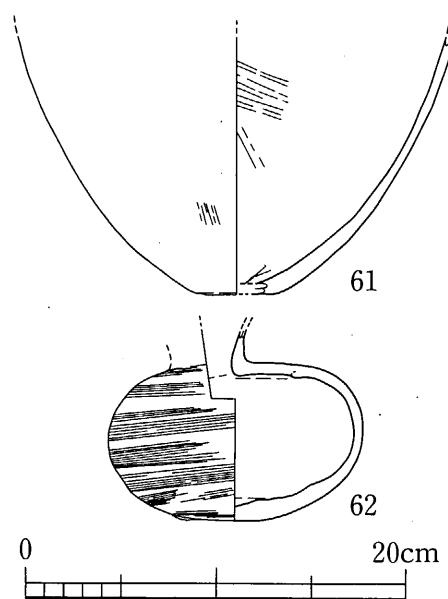
SD1009の西側を弧状に走る。幅は東端で約3m、西端で2.5m、深さは東端で63cmを測る。床面は東端で65.24m、中央部で65.45m、西端で65.33mを測る。

(3) SD2023

1号墳の西で検出した。旧地形を段切りした部分での検出のため残りが悪い。幅1~1.2mを測り、弧状に走る。

出土遺物（第24図 図版15）

61はSD1009段の西側から、62は同じく段の東側上層から出土した。61は器面の摩滅が著しい弥生式土器で、甕の底部付近の破片である。底部は僅かに平坦面を残し、胴部はやや長胴気味に立ち上がる。62は平瓶で口縁部と胴部の一部を欠失する。胴部最大径13.45cm、残存高10.1cmを測り、体部から底部に欠けてカキ目が施される。

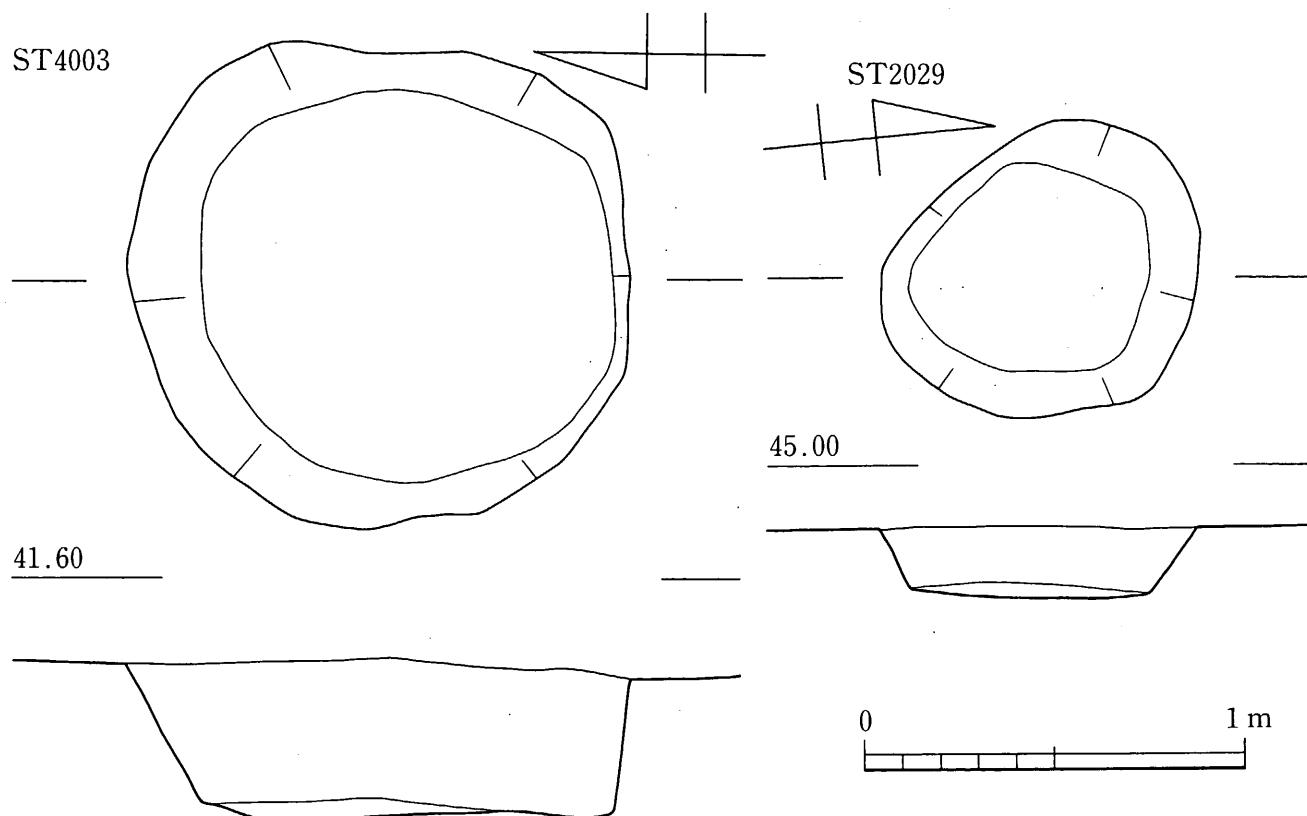


第24図 SD1009出土土器実測図（縮尺 1/4）

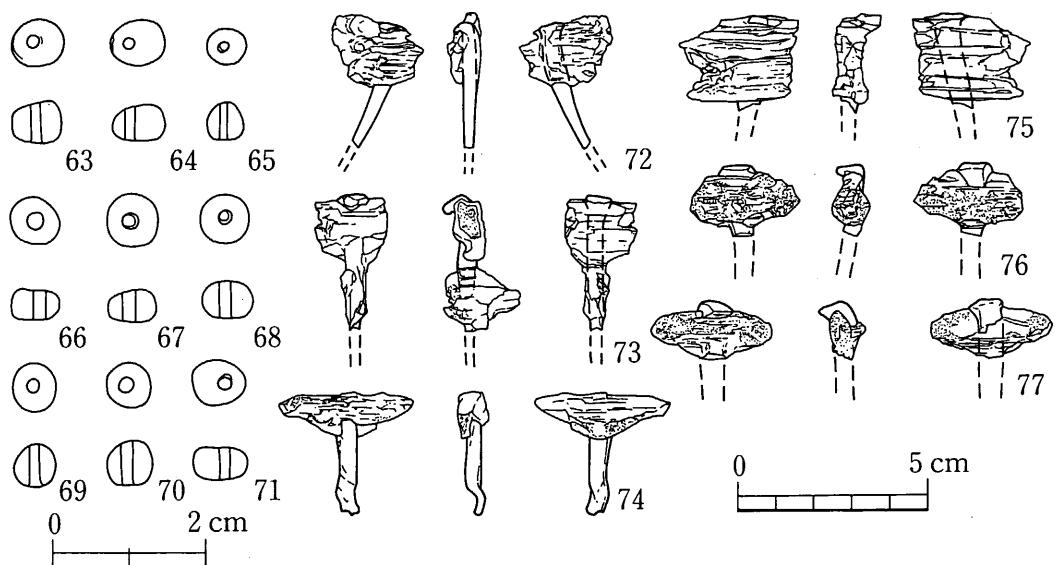
6. その他の遺構

(1) ST2029 (第25図)

1号墳の北側の一段落ちる面で検出した。平面プランは径90cm 程の略円形を呈し、壁高は約15cm を測る。埋土から数珠玉が出土した。近世墓と考えられる。



第25図 近世墓実測図 (縮尺 1/20)



第26図 ST2029・4003出土玉・鉄釘実測図 (縮尺 1/1・1/2)

(2) ST4003 (第25図)

SI4002の南側で検出した。平面プランは円形で、径約130cmを測る。壁高は40cm程を残す。埋土から釘が出土した。形状から近世墓の可能性が高いと考えられる。

(3) SX1001 (図版11(1))

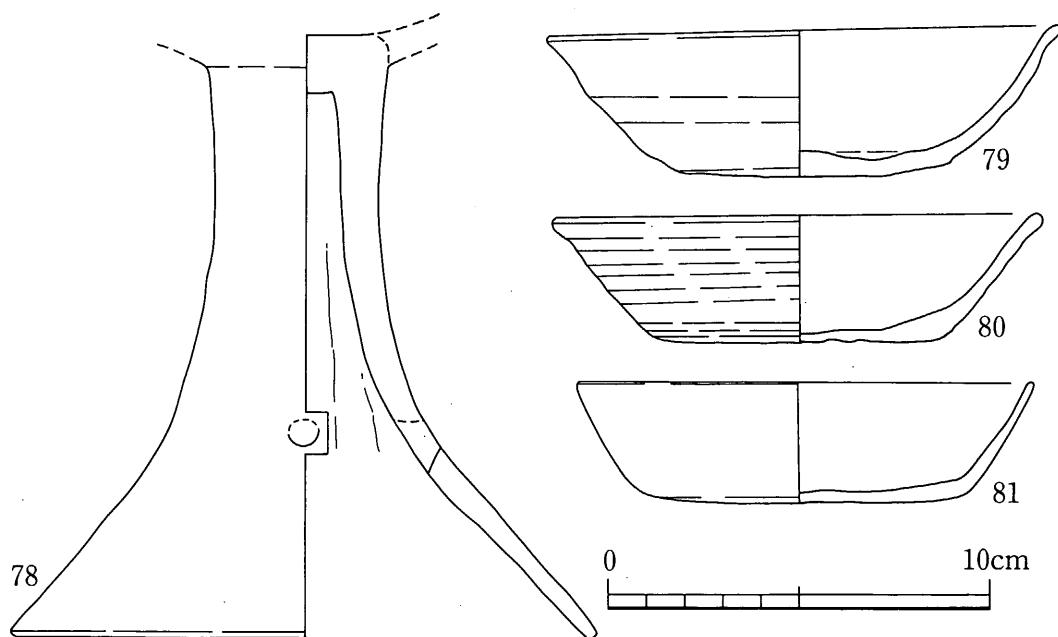
SD1012の内側で検出した。幅5m、長さ7m以上を測る長方形プランを呈し、深さは1.4m程度である。中には礫が多数投棄されていた。

出土遺物 (第26図 図版14・15)

63~71はST2029から出土したガラス製の数珠玉である。径5~7mm、厚4.5~6.6mmを測る。72~77は鉄製の釘で、いずれも木質が付着する。

7. ピット出土の遺物 (第27図 図版11(2)・15)

78は1号墳の周溝下より検出したSP1013から出土した弥生時代終末の高壙の脚部である。脚部はほぼ完形に近く、相対する2方向に穿孔を有す。脚裾径15.4cm、残存高16.0cmを測る。79はSK3005に切られるSP3007から出土した土師器壊aである。口径13.5cm、器高4.0cm、底径7.0cmを測る。体部はやや張りがあり、ナデによる凹凸が目立つ。口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ切り離して、板状圧痕が残る。80はSP3007を切るSP3008から出土した土師器壊aである。口径12.8cm、器高3.4cm、底径7.7cmを測る。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。底部はヘラ切り離して、板状圧痕が残る。また、体部には狭間隔で凹凸が残る。81はST4004の東側のSP4074より出土した土師器壊aである。口径11.9cm、器高3.3cm、底径7.8cmを測る。体部は直線的にやや浅く外傾し、底部はヘラ切り離して板状圧痕が残る。



第27図 ピット出土土器実測図 (縮尺 1/2)

IV まとめ

1. 住居跡について

SI1005は削平によりその大半を失っており、時期を推定できる資料は支脚だけである。その形状から概ね弥生時代終末期前後と考えられるが、確定することは困難である。ただ、隣接するSP1013から出土した遺物は、この時期の遺構が付近にないことから住居跡と近似する時期のものかもしれない。SI4002は出土遺物が少なく、また甕等の時期が確定しそうな器種が出土していないこともあり時期は明確ではないが、床面近くで出土した壺や高坏から5世紀に入る頃のものと考えられる。

2. 古墳について

1号墳は大破しており、石室構造は明確でないが、SI1004より出土した須恵器は15~23の高坏、28の龜は陶邑編年のI型式4段階に位置づけられるが、高坏蓋の摘みの形状等に後出的な要素も見られる。また、24~26の坏は陶邑編年のII型式4段階、小田富士雄氏編年のIIIbの範疇に位置づけられる。

2号墳も大破しており、遺物の出土もみなかつたので明確にはできないが、唯一残る腰石は形状から横穴式石室のものと推定され、また、その大きさから側壁のもので、西方向に開口していたと思われる。

3. 墳 墓

ST1014から出土した31は山本信夫氏の編年によるとVII期に相当する。また、ST2045出土の32はIII期と考えられる。ST3003からは比較的多くの資料が出土している。33・34は中島恒次郎氏の椀形態の型式設定によるとIII-1類に相当する。35は同じくI-6類と考えられる。36は丸底坏cであるが口縁部の外反が強い。坏aでは37が山本氏編年のVII期に、38~42は口径・底径はIX期の範疇に収まるが、器高はVII期とIX期のほぼ中間の値を示す。ST3004出土の43は底部のみで明瞭さを欠くが小田富士雄氏の須恵器編年によるとVII期に比定される。ST3009出土の44は器高が高く、体部がやや外反して伸びるが山本氏編年のVI期に近いようである。45は体部の外傾が弱く、短頸壺の蓋のような形状を示すやや特異な坏である。46は山本氏編年のVII期に比定される。47は小田氏編年のVIII期に比定される。

ST3003はVII期の坏が1点認められるが、他の坏は全体的な様相からIX期と考えられる。また、椀形態のものも時期的に矛盾がないと考えられる。その他は単品の出土の物で確定しえないが、出土状況から、概ね資料の時期に近いと考えて間違いないのではないだろうか。

4. 土 壤

土壙で時期が確定できる資料が出土したのはSK3006のみで坏はVI期またはVII期に比定される。

5. 小 結

SI4002は5世紀前半代の住居跡と考えられるが、周辺でこの時期の遺構を見ると、小規模な谷部を挟む脇田遺跡A地区から8軒の竪穴式住居跡が検出されている。時期的には本住居跡に近い時期のものであると考えられる。また、住居跡以外では脇田遺跡B地区から布留0～1式の甕等が出土する。本住居跡は調査区の際で検出されたこともあり、集落を呈すものかどうかは不明であるが、近い位置に唐人塚遺跡や剣塚遺跡があり、この時期の古墳や墳墓が検出されていることから、周辺にこの時期の集落が存在することは十分に考えられる。

古墳は脇田遺跡A地区で横穴式石室を内部主体とする古墳が検出されたほか、唐人塚遺跡では6基の横穴式石室を内部主体とする古墳が調査されている。5世紀後半から8世紀代に築造されたと考えられている。唐人塚遺跡の北側に位置する剣塚1号墳は全長42m、前方部35m、後円部径21mと推定される6世紀前半の単室横穴式石室を有す前方後円墳である。これらの遺跡が所在する低台地の先端近くにも埴安神社古墳がある。一方、現在の脇田遺跡B地点から山稜側においてはまったく古墳が確認されておらず、この山稜から延びる開析された低台地上に古墳群が形成されていた可能性が高い。9世紀中頃～10世紀前半までのものが主体を占める本墳墓は大宰府条坊の西側に連なる墳墓群の一群としてとらえられるが、近隣の剣塚遺跡では9世紀代の7基の木棺墓と1基の土壙墓が検出され、その西側の大宰府条坊跡第99次発掘調査では9世紀後半の墳墓が6基検出されている。脇田遺跡B地区でも木棺墓が発見されているが12世紀前半のものである。脇田遺跡B地区は小山の頂部に築かれているが、ここから延びる低台地上は9世紀を中心とする時期に墳墓造営の活発化が伺われる。

図 版

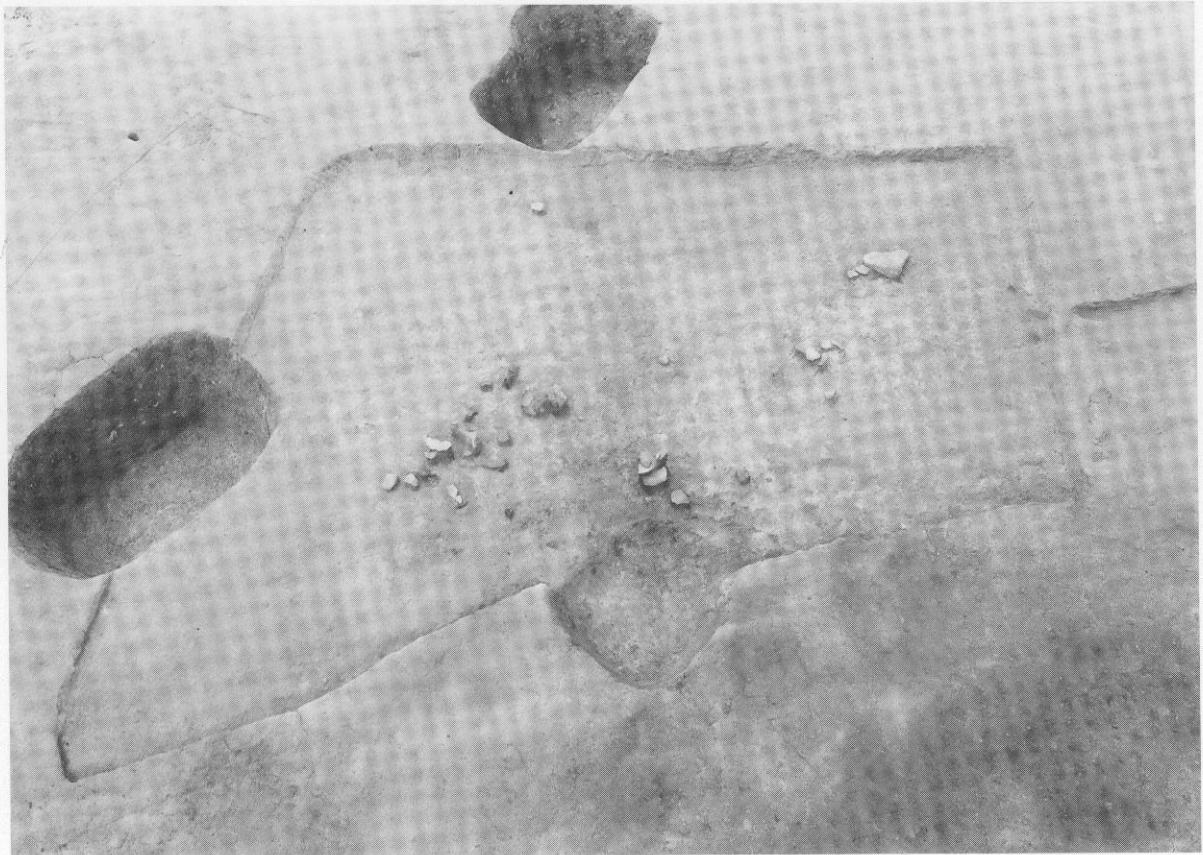
図版 1



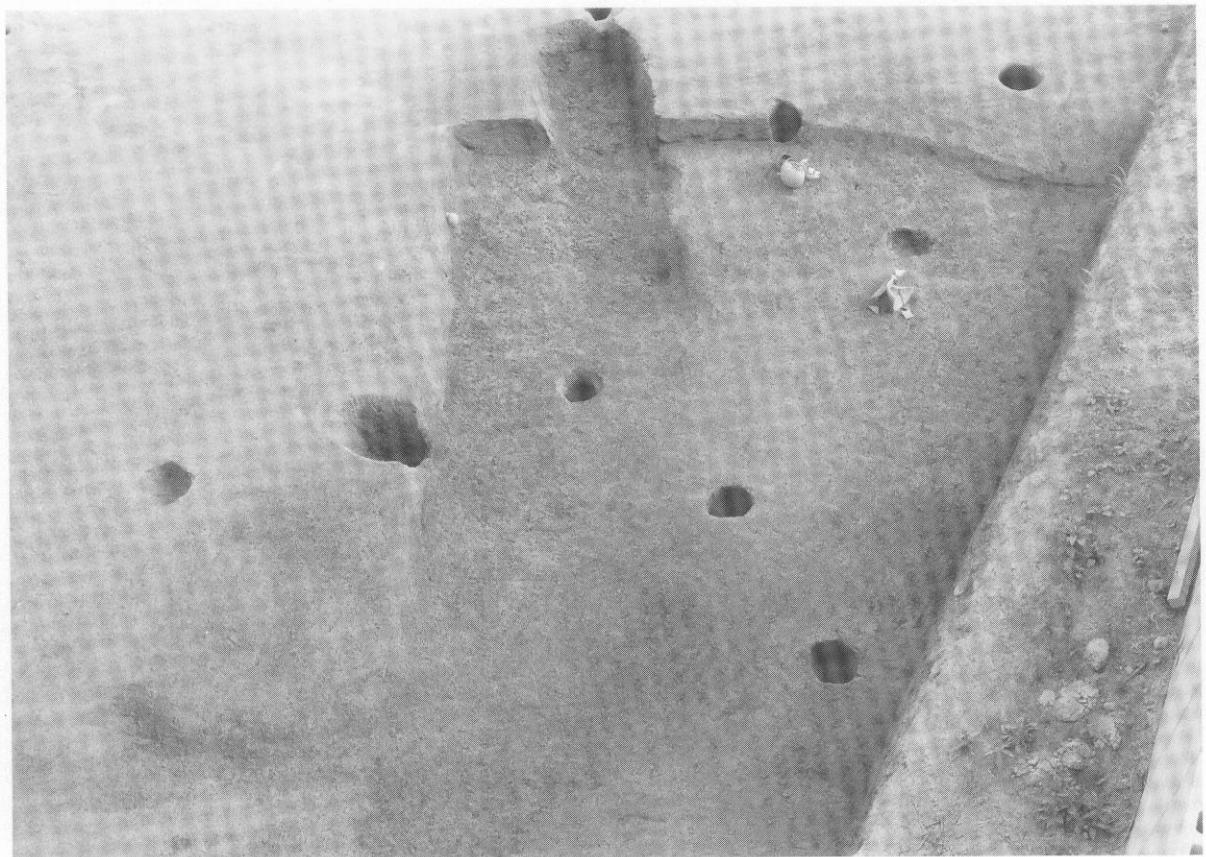
(1) 調査区全景（上空より）



(2) 調査区（北より）

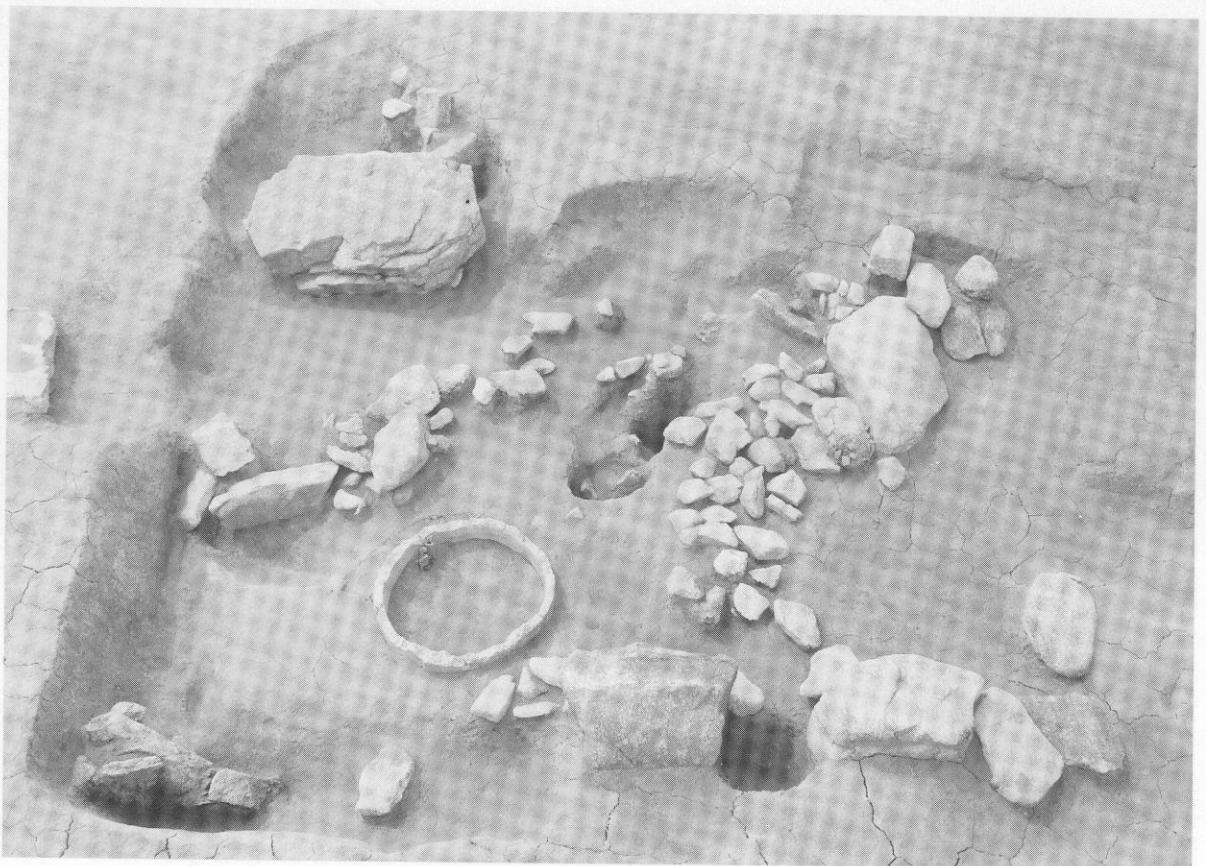


(1) SI1005 (南より)

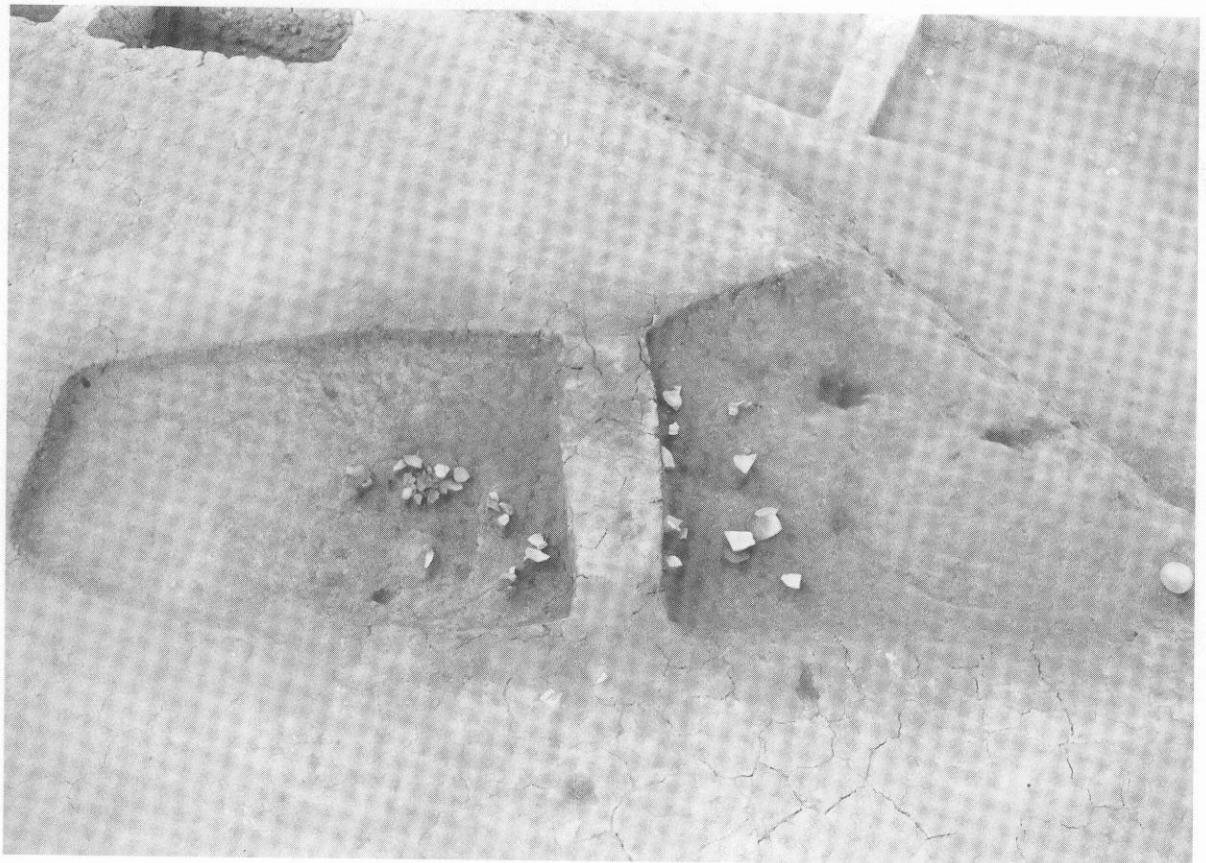


(2) SI4002 (北より)

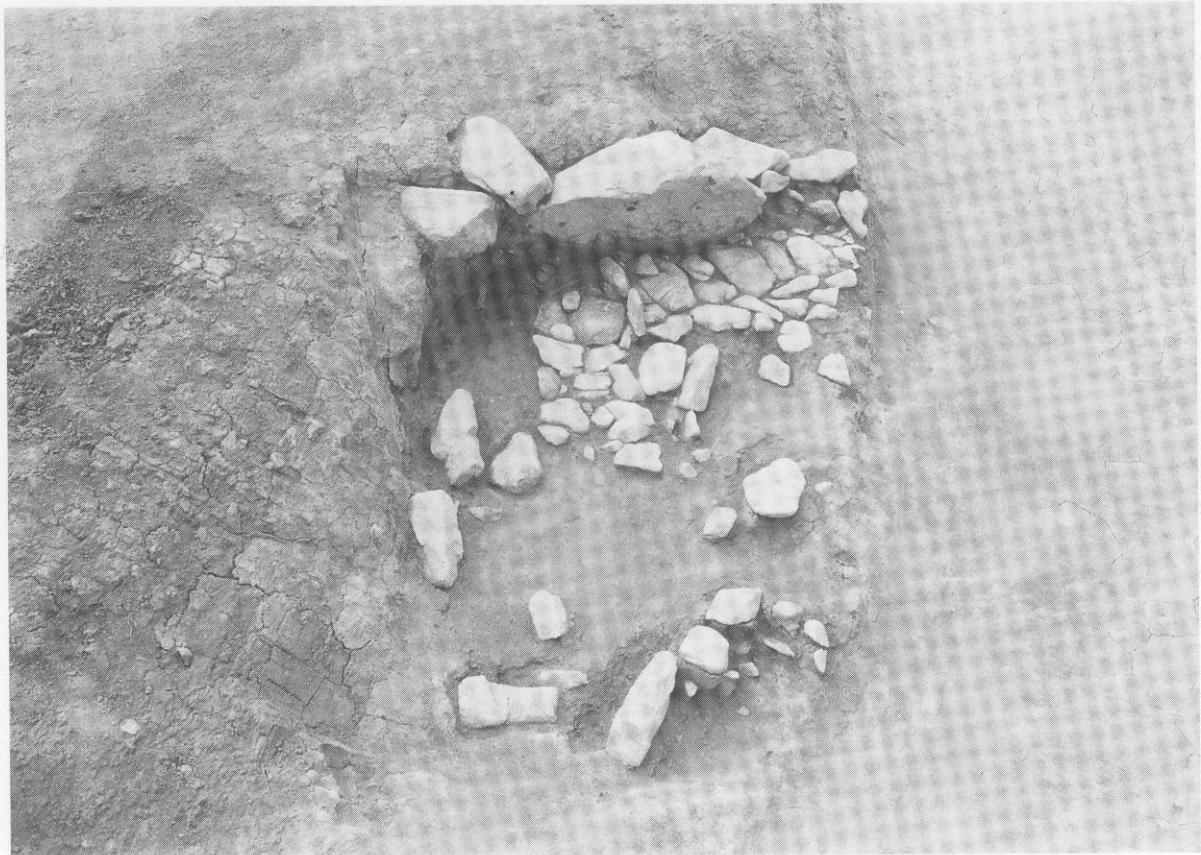
図版 3



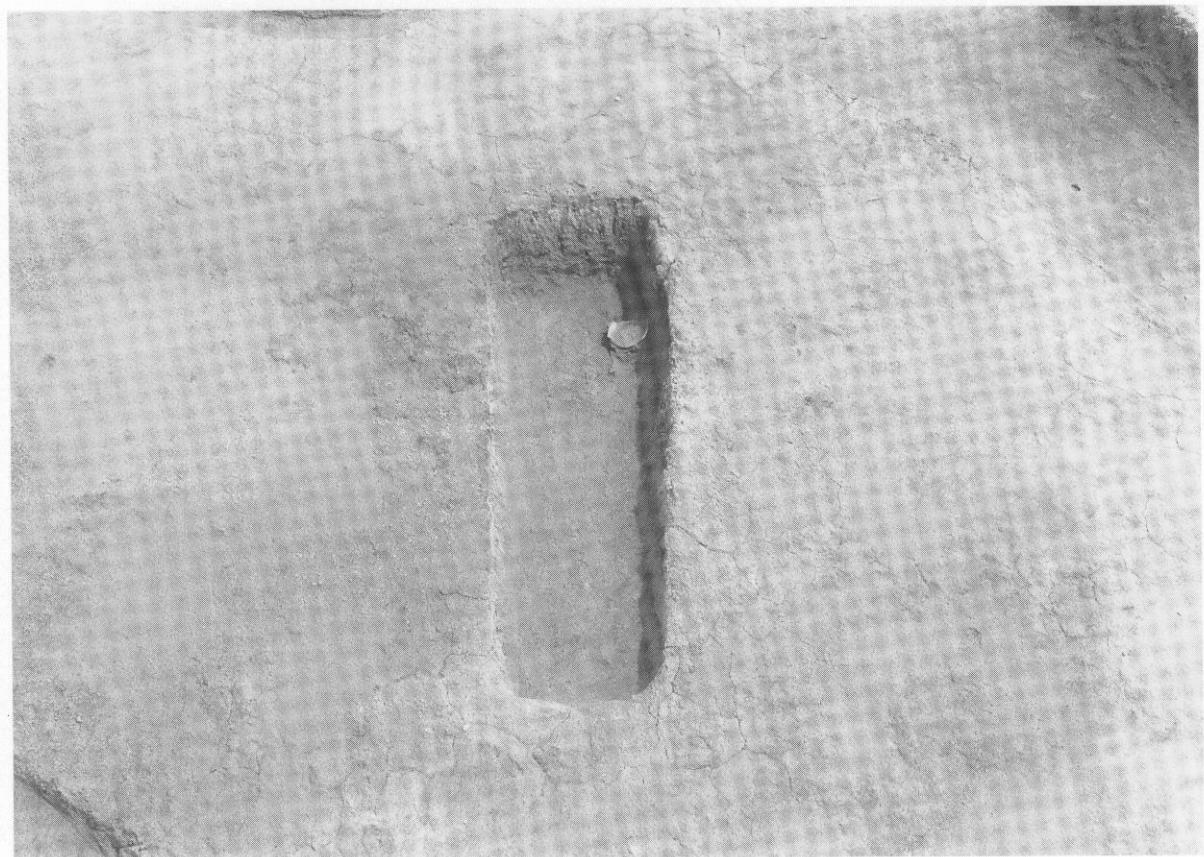
(1) B 群 1 号墳石室 (北から)



(2) B 群 1 号墳周溝 C (東から)

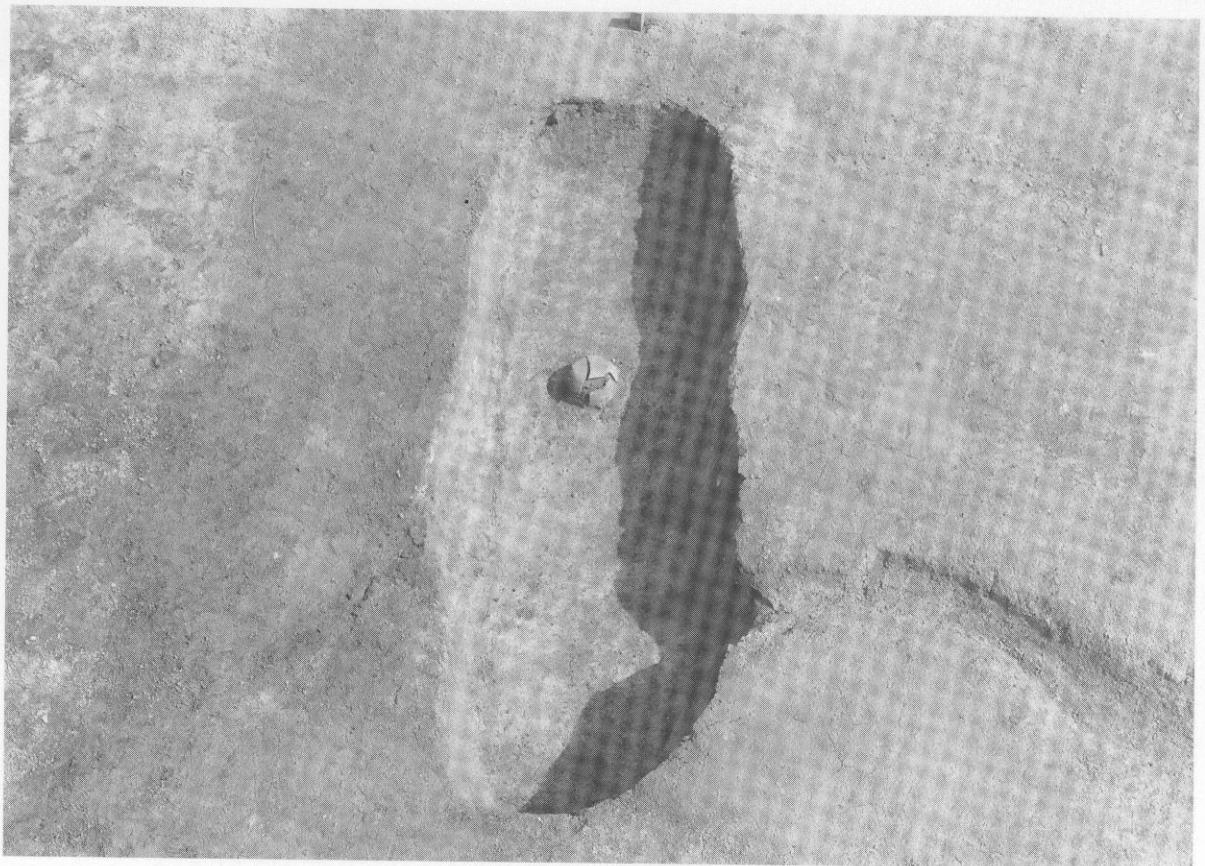


(1) B群2号墳石室（北より）

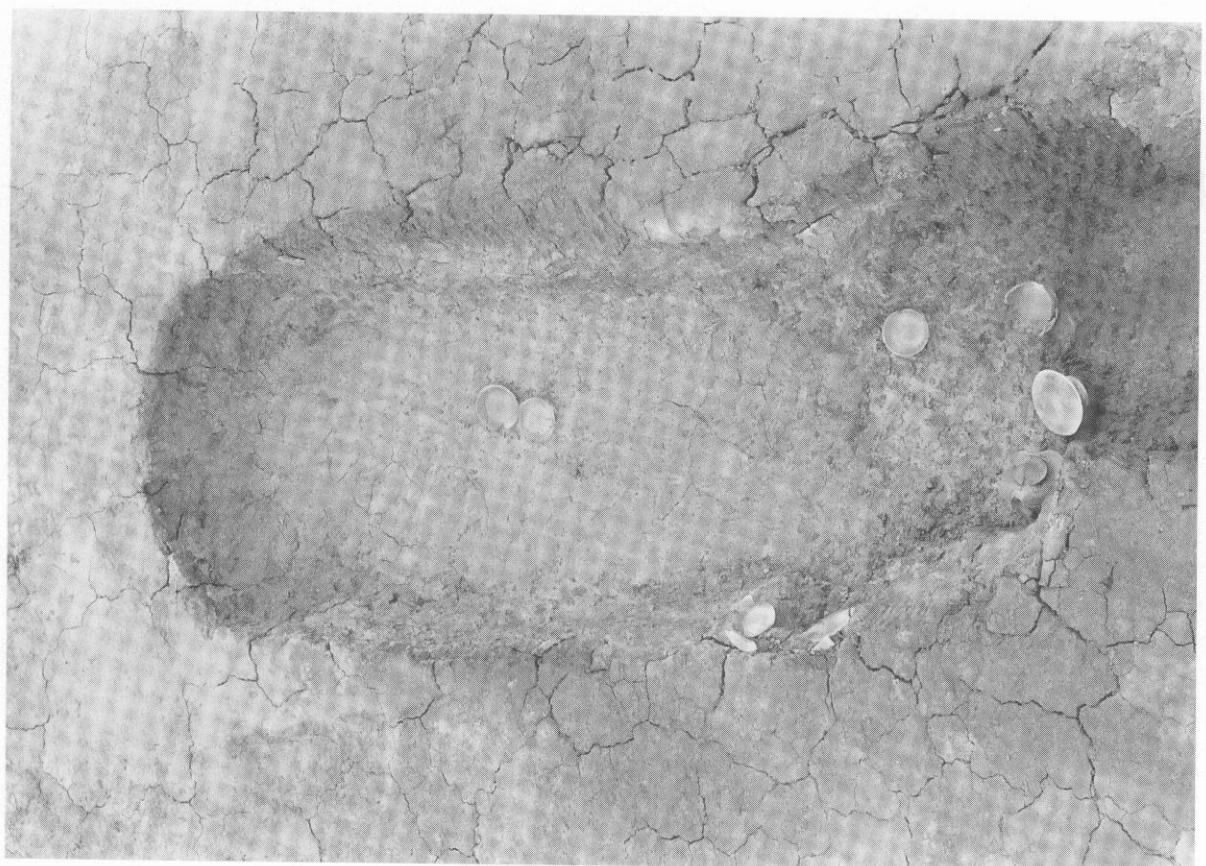


(2) ST1014（西より）

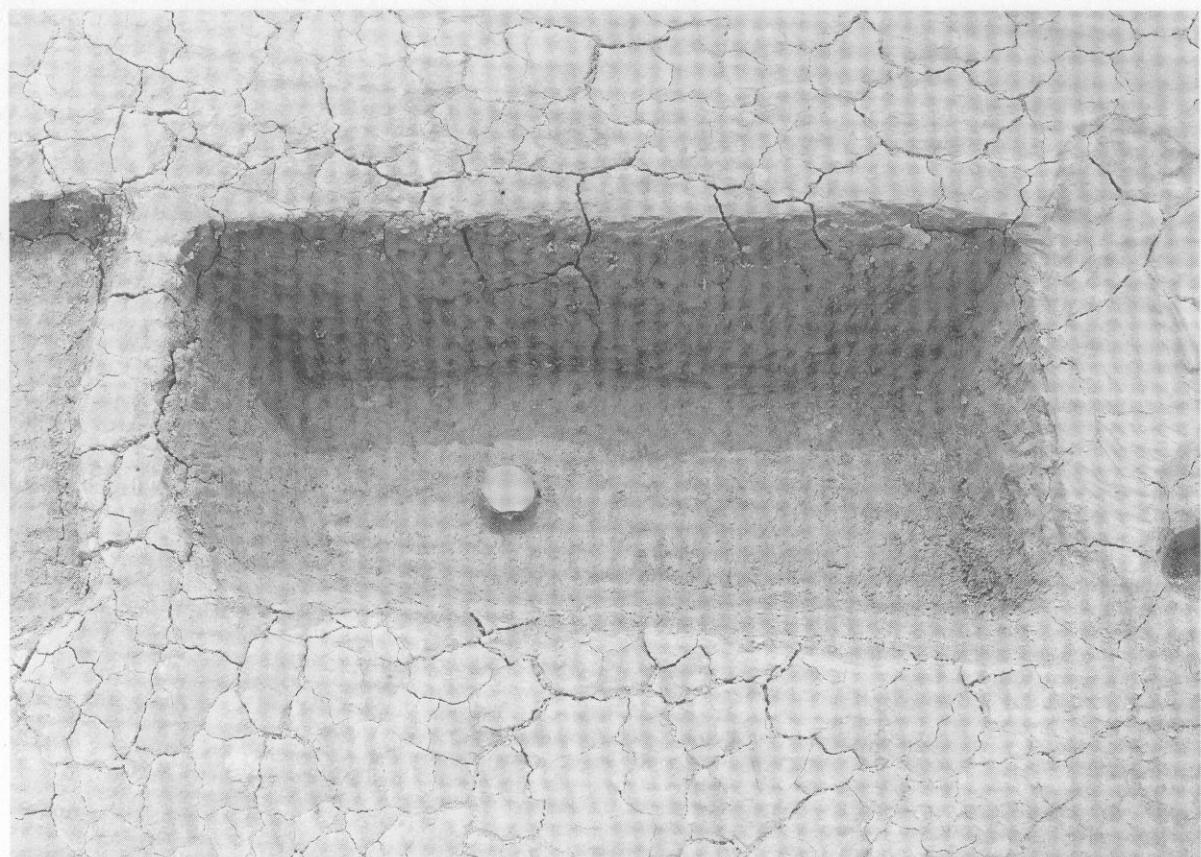
図版 5



(1) ST2045 (北西より)



(2) ST3003 (東より)

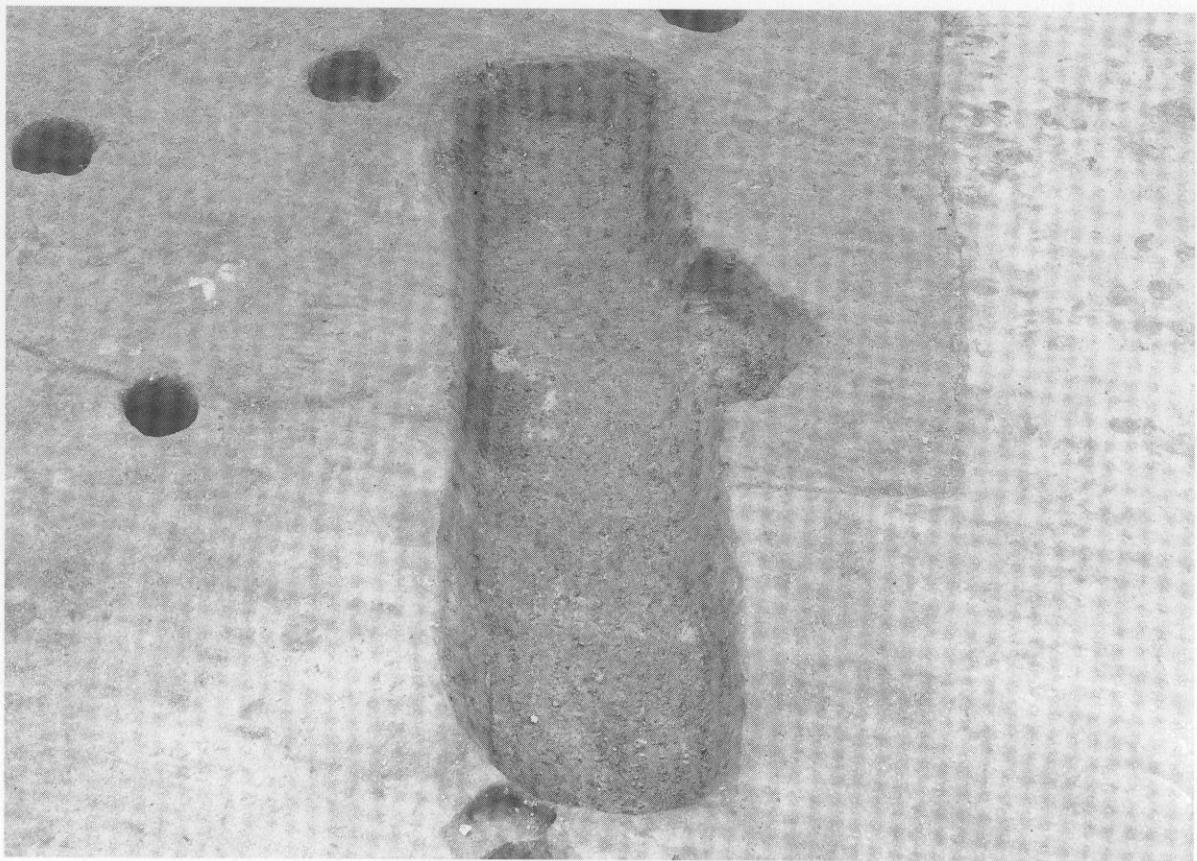


(1) ST3004 (東より)

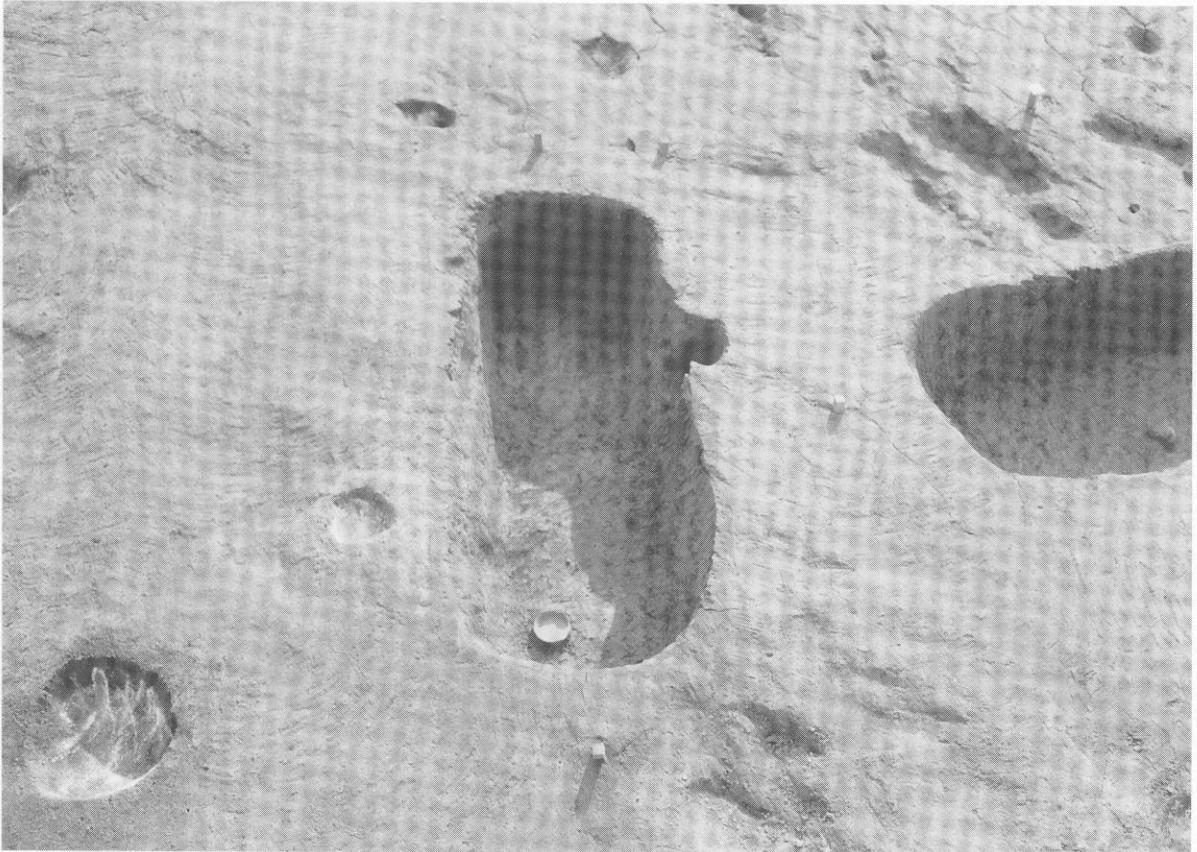


(2) ST4004 (南より)

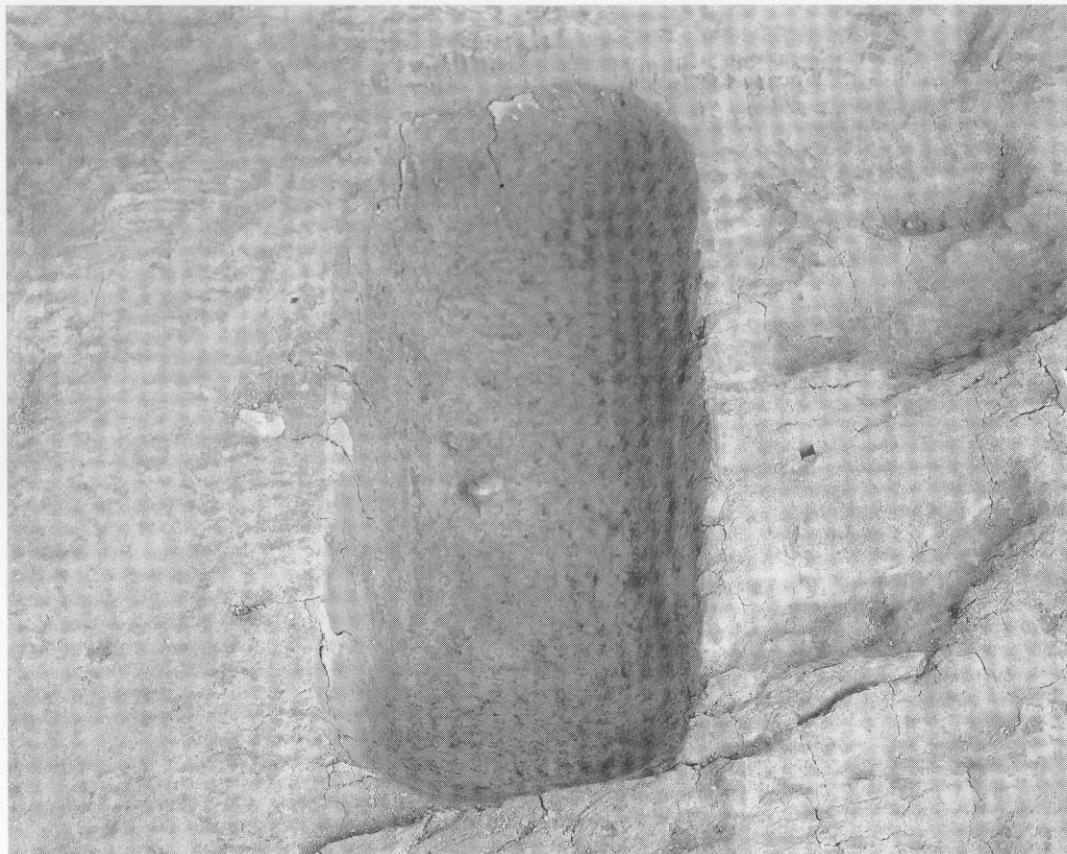
図版 7



(1) ST4005 (南より)



(2) ST5001 (北より)



(1) ST5002 (西より)

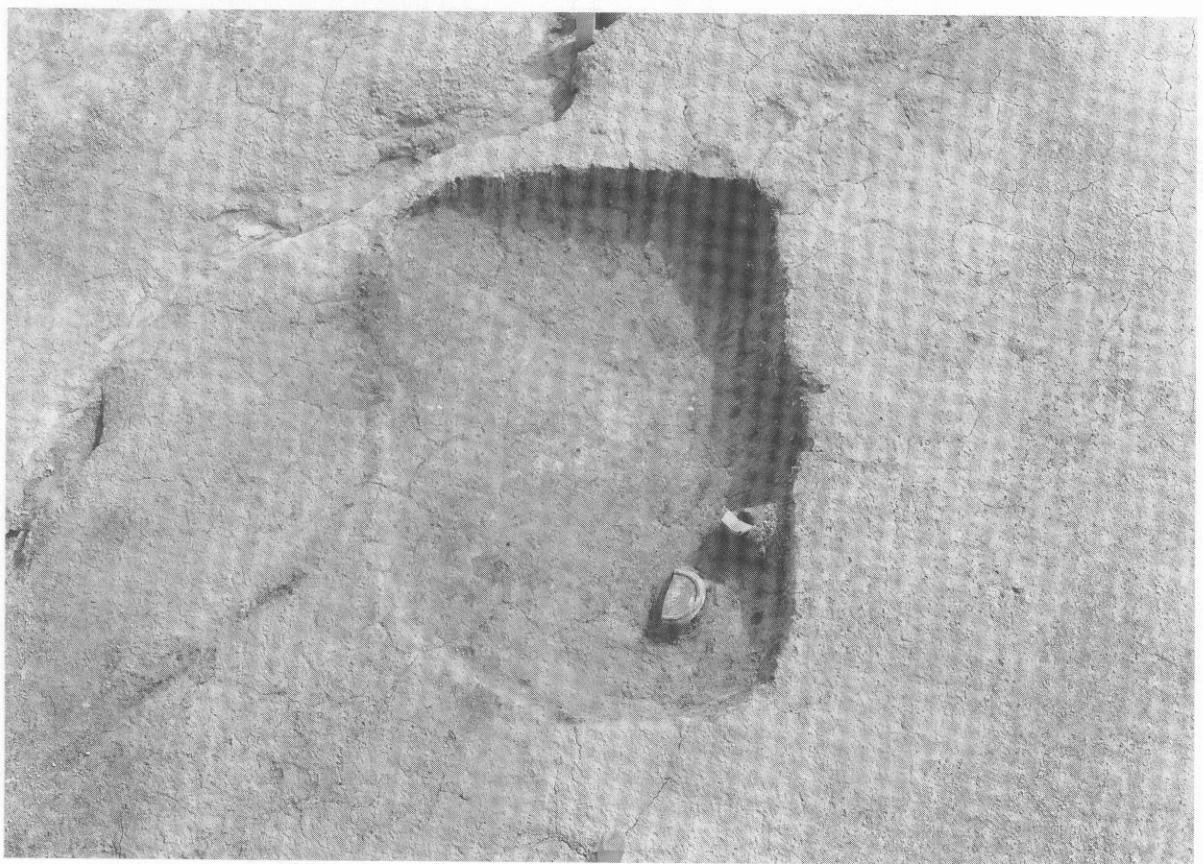


(2) ST5003 (南から)

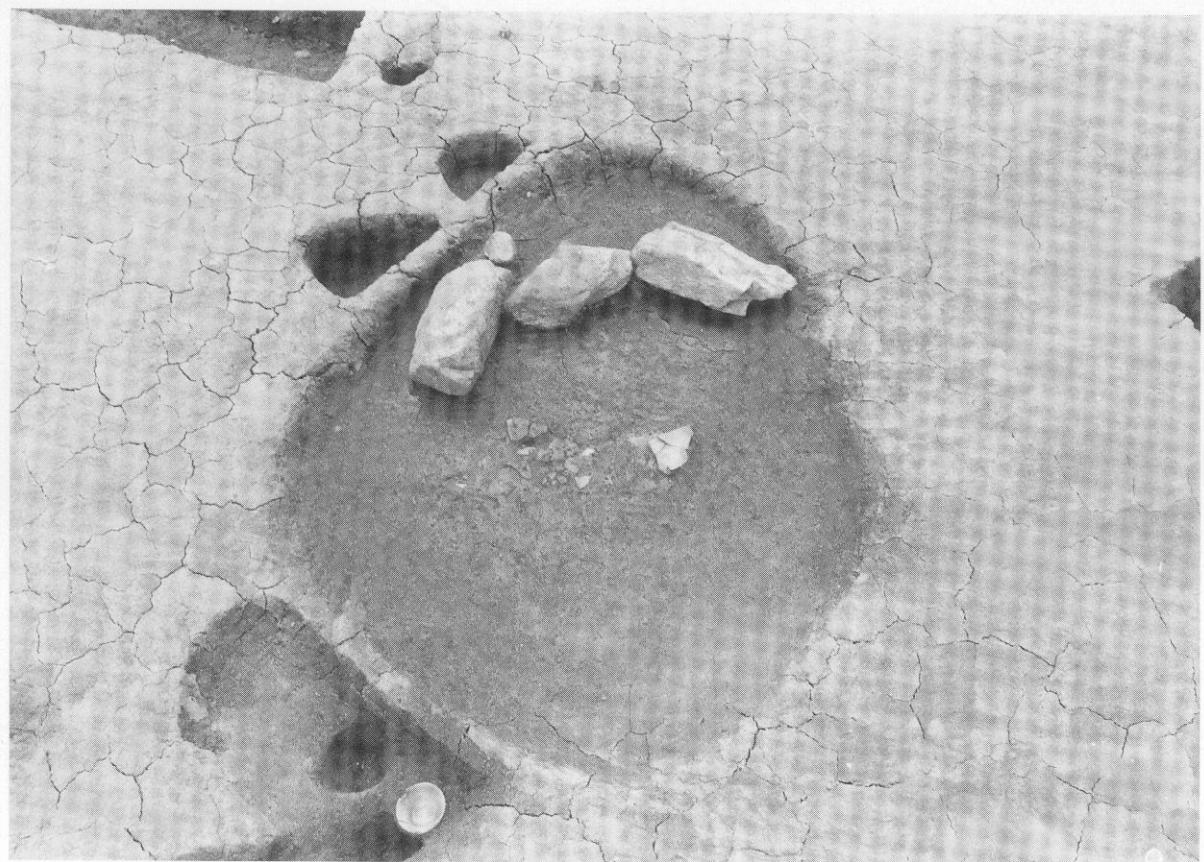
図版 9



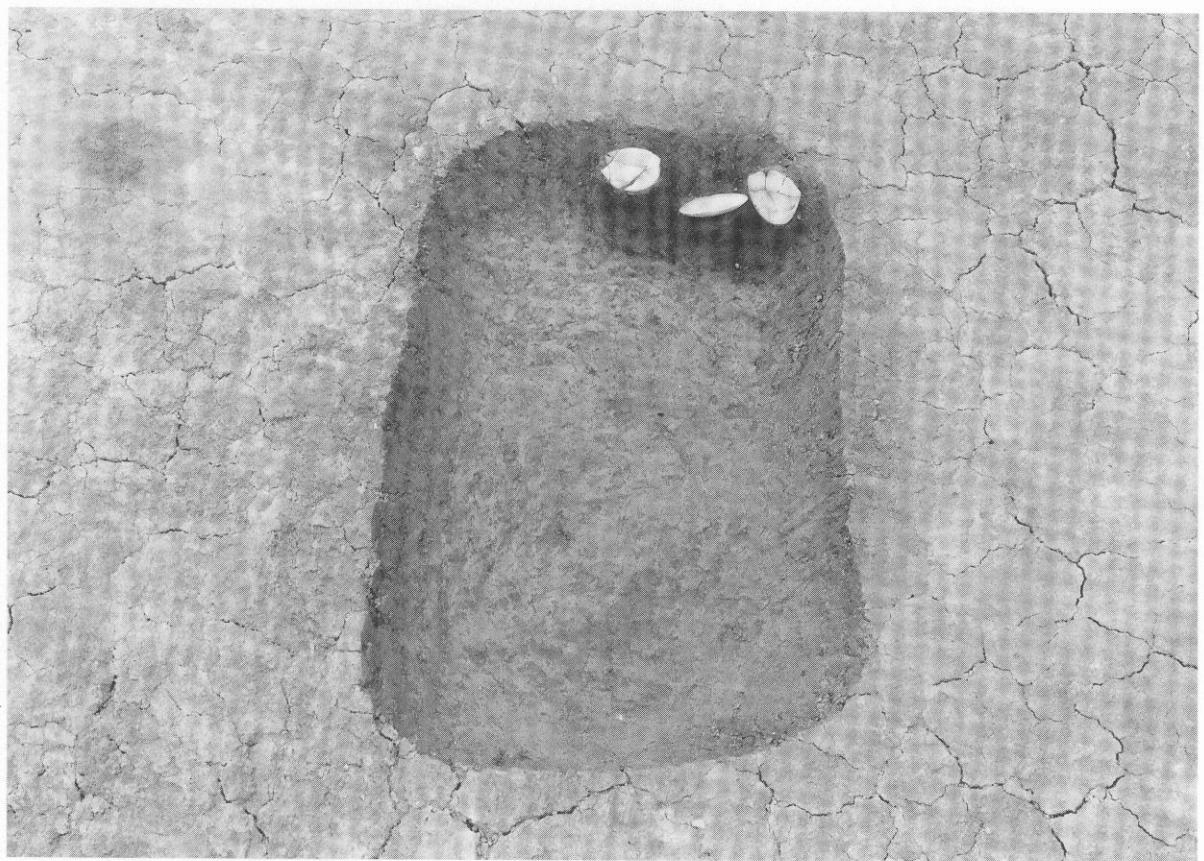
(1) ST5004 (北より)



(2) SK2044 (北より)

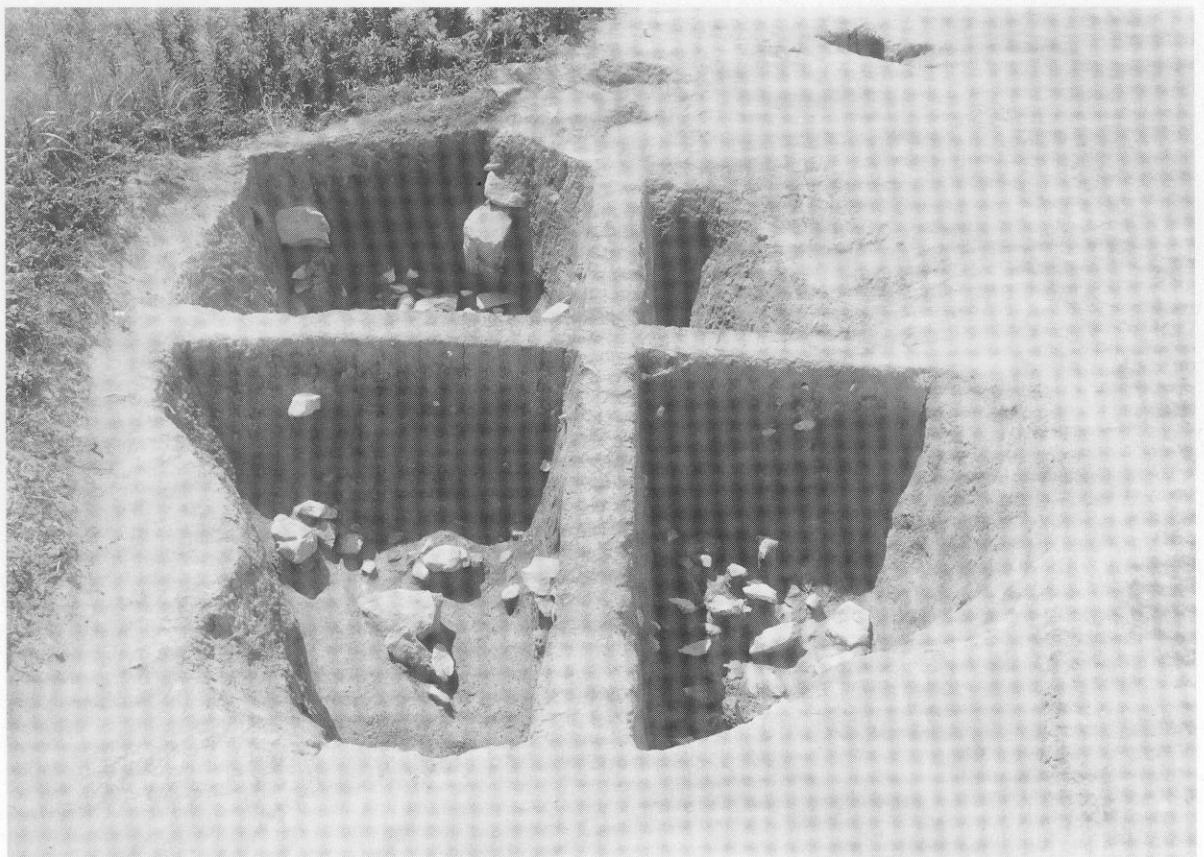


(1) SK3005 (北東より)



(2) SK3006 (東より)

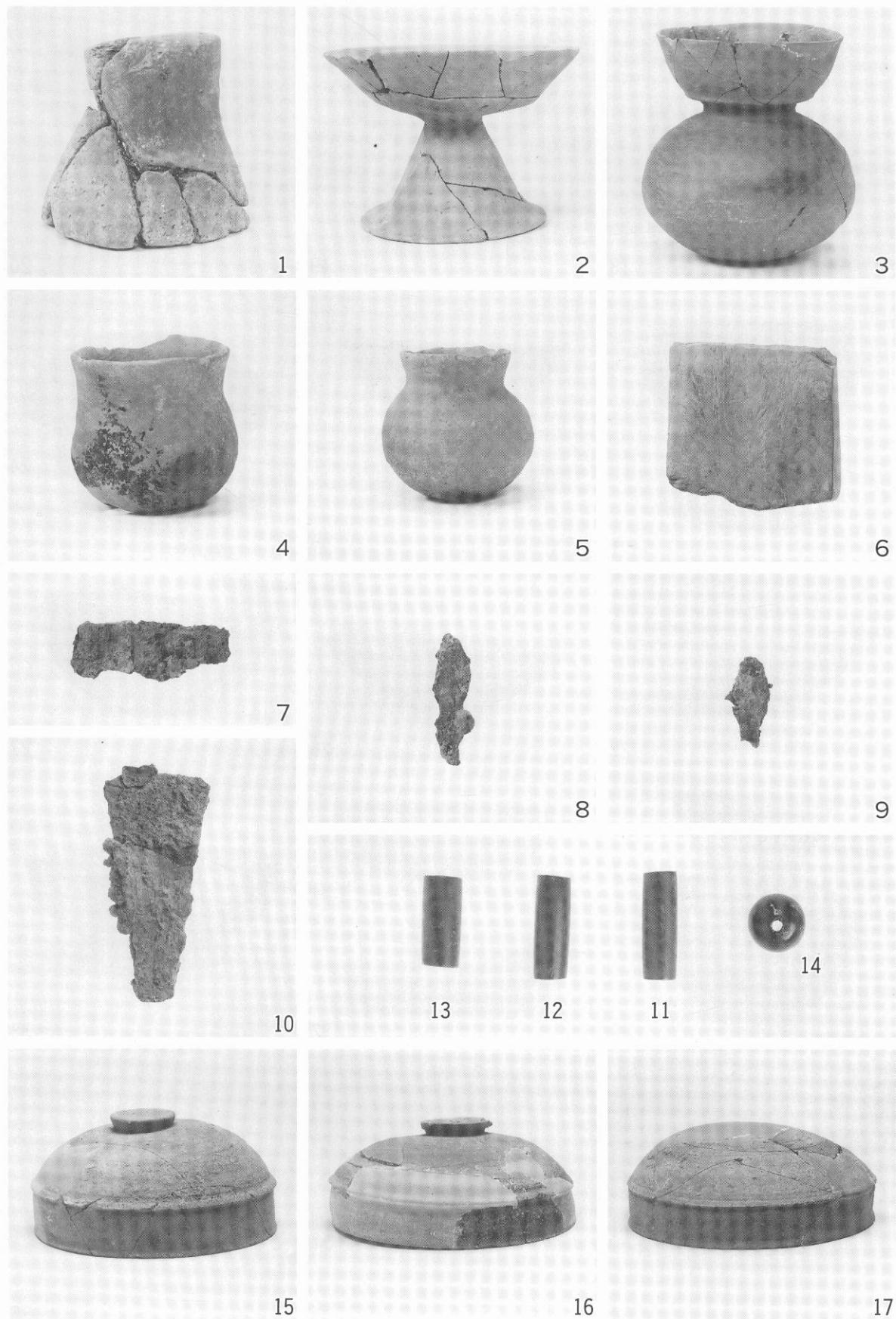
図版11



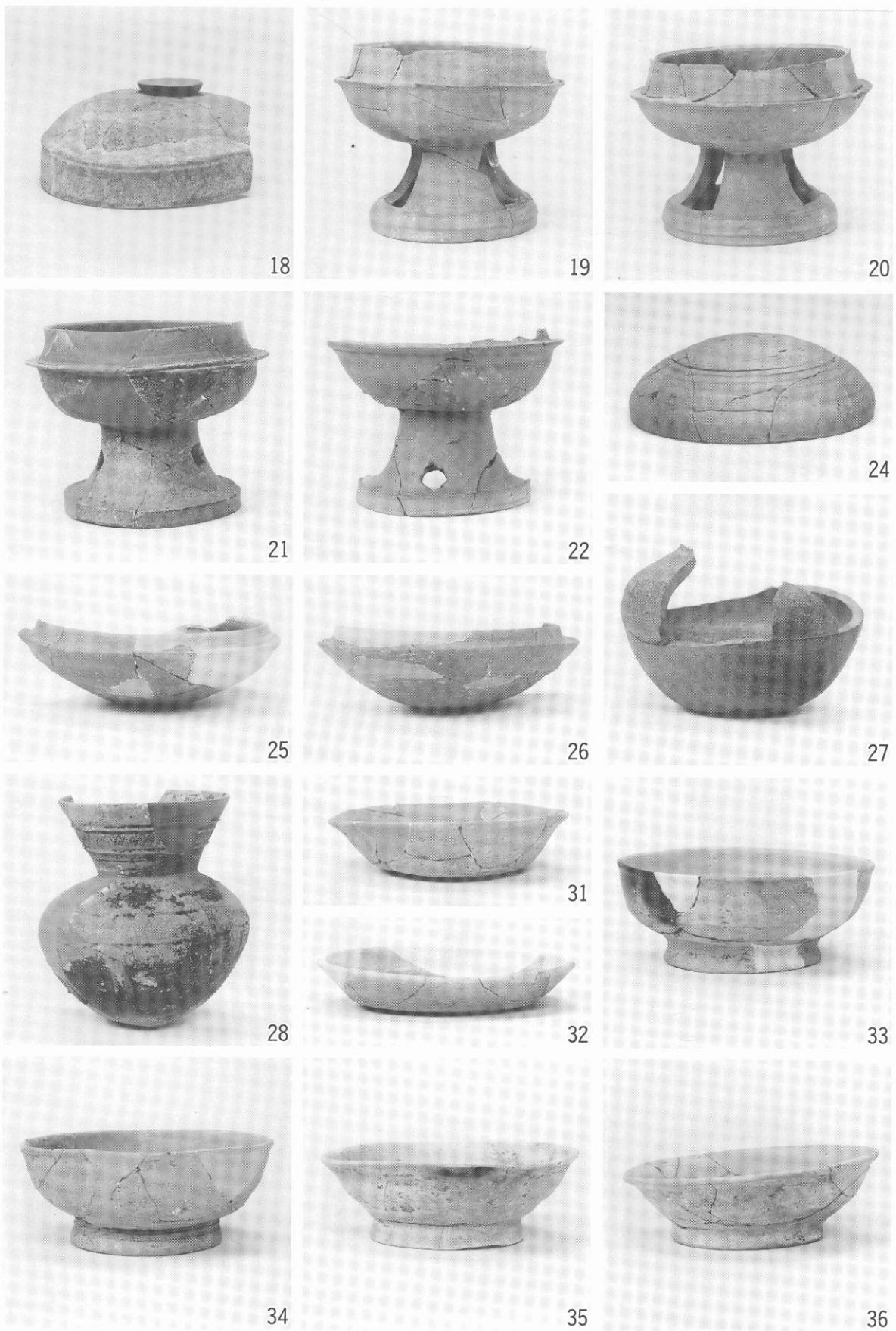
(1) SX1001 (北より)

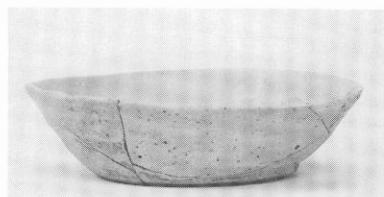


(2) SP1013

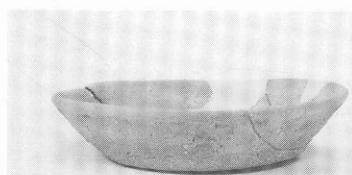


图版13





37



38



39



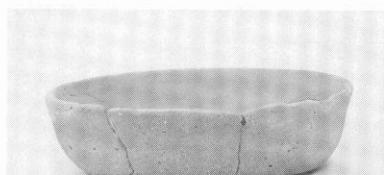
40



42



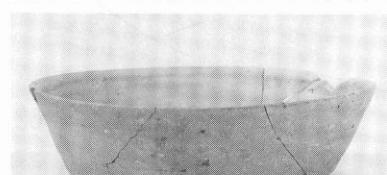
44



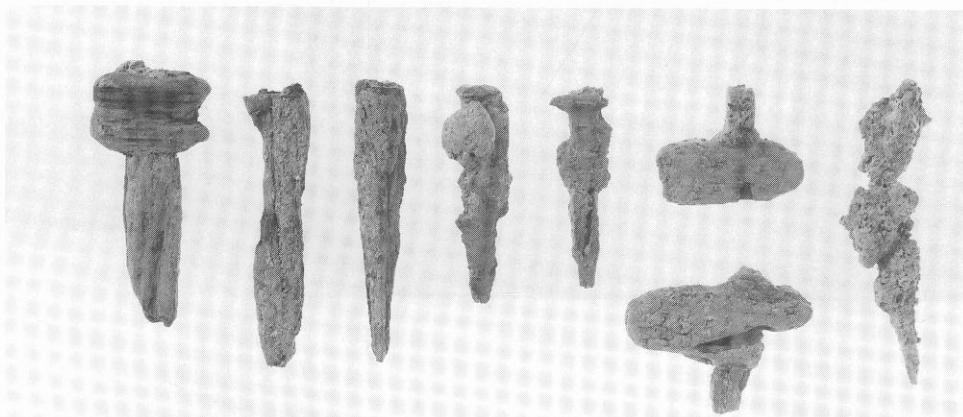
45



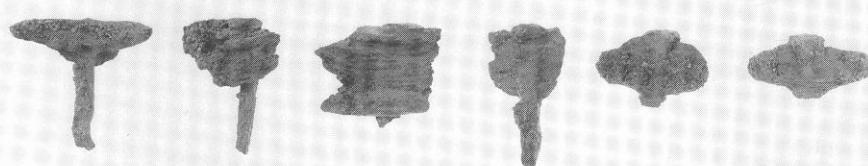
46



47



48~55



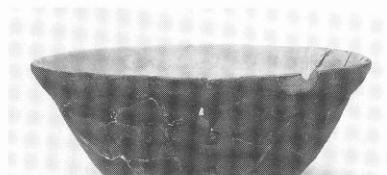
72~77



56

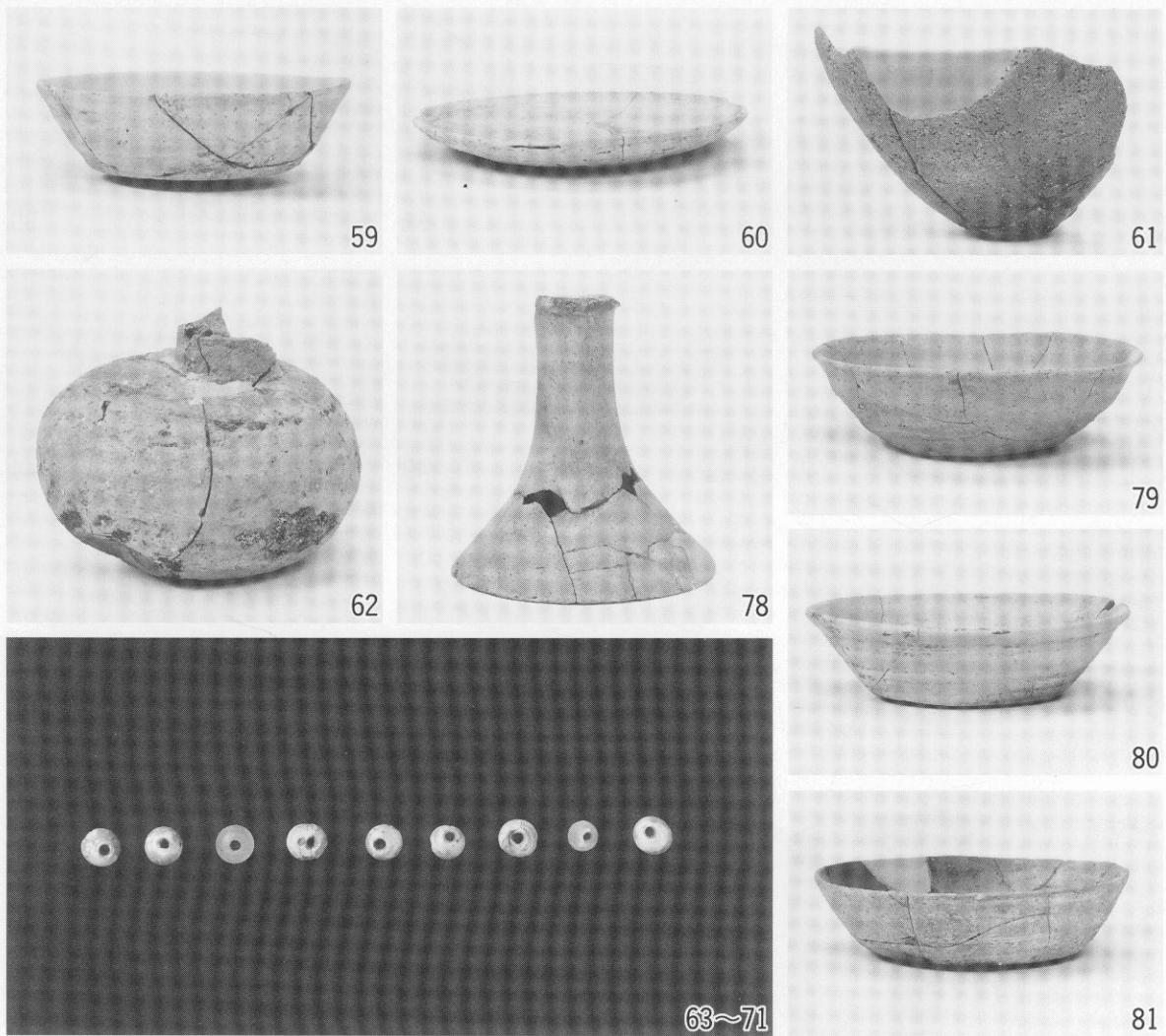


57



58

図版15



報告書抄録

フリガナ	ダザイフジョウボウアトダイ 123 ジハックツチョウサ								
書名	大宰府条坊跡第123次発掘調査								
副書名									
卷次									
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第59集								
編集者名	奥村俊久								
編集機関	筑紫野市教育委員会								
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092(923)1111(代)								
発行年月日	西暦1999年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
	市町村	遺跡番号	。	''	。	''			
大宰府跡	福岡県筑紫野市 塔原	402176	210044	33度 29分 38秒	130度 30分 29秒	19920608 19921202	1	2,958	都市計画 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
大宰府条坊跡	住居跡 古墳 墓地	弥生時代 古墳時代 平安時代	豎穴式住居跡 古墳 墳墓		弥生式土器 須恵器 土師器 鉄釘				

大宰府条坊跡

第123次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第59集

平成11年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 大同印刷株式会社
佐賀市天神1丁目1-32

付図 大宰府条坊跡第123次発掘調査遺構配置図(縮尺1/200)

